增補雅言集覽

廿九

813.6
I619g
Wn8

813.6
I619g
Nnd

帝国図書館蔵書

国立国会
41.3.31
図書館

691345

増補雅言集覽卷之廿九

石川雅望 集
中島廣足 補

○宇の部

う 諾（信明集）「ねふのうちはいかとものうとものいひそてよ人たのめかるることかせら れそ（拾玉集）一「さぞといはゞまことにさぞとあとうちてなやうやといふ人ざに かかゝ（万）十六、九「いかもうもかりそるまゝはゆるそべきかさち見めりもわれもよ りなん

う 得（源 をとめ）十三 をゆかくて身まづゝくかんありける工御らんどうる所あり て（伊勢物）五十五段 昔男おもひかねたる女のえうまどうかりてのよ工

補 う 聲ナリ（宇治拾）三、小式部内侍云々 四こ絶五こをぞりゆきもやらでよこたりけるとき うといひてうゝろざまこそふゝのへりけれ

うろ（新六）一、菖蒲卿知家「有漏の身はりのあやめのくさまくらあの世い旅の夢ぞかな ゝき

補 うろくづ（榮花）「宇治川のそこまゝゝづめるうろくづを網からねどもをくひつる

らあ

補 うた（宇治拾）つまのうばこういらありつるあとゞと、へい

うはは 上葉（千載）秋上よみ人しらす「いかなれば上葉をふたる秋風は下をれぬらん野べのかるらや

うはゝ（夫）十一 範綱「いあみのを朝ふみわさるかり人の笠はうはゝになびく萩はら

うもべ（源せきや）六 うはべこそあれつらきこと多りり（同帚木）四 うもべばかりはなさはにて（同）十二 うゝろやをくのぞけき所だあつよくばうはべの情ゝおのづからもてつけつべきわざをや（万）四「うもべあき物かも人ゝゝかぞかり遠き家ぢをかへをと思へば（同）四「得羽重無妹（ナキ）よもあるかもかくばかり人の心をつくをと思へば（源うす雲）十一 つぎ〳〵の人を心のうちはいおもふ事もやあらんうはべゝをこりあはとゆる頃をひありかゝ（同帚木）十六 うもべの筆きえてとゆれど云々（同常夏）四 うもべいいとよき御中の昔よりさはがはひまありけるに

うはゞき（伊勢物）一九 昔むさゝある男京ある女のもとに聞ゆれば也づかゝ聞えねばくるゝとかきてうもゞきはむさゝあぶとかきておこせて（夫）十一 爲家「かけてとふたゞたまづさとゝらをらん鴈のつをさは雲のうもがき（新古）離別「北へ行かりれつをさにことづてよ雲のうもゞきかきたえぞゝて（宇治拾）十一 廿 大和より瓜を人のもとへやりはるふみのうゝがきは前の入水の上人と書さりれるとゝ

補 うはかをみ（拾玉）二「ゝはがまの浦の煙のうもゞをみふゝき哀れぞ立そひはける（同）三「住吉の松の梢のうもゞをそとりをぐる春の色ゝな（同）四「かさ岡のをたりやあぎのうもゞをみ繪にかくものゝこれゝあらぬゝ（同）「ひをりぬる春の山田のうは霞やへに成行夕ぐれの空

うもをく（憂塞）（源夕かは）「うばをくゞおこをふ道ををるべゝてこんよもふゝき契りたゞふを（夫）廿四 長能「うばをくゞおこをふ山のさくら花けふのをゆきれいろはぞ有ける（空穗くら開）「うばをくゞおこをふ山の椎ゞもとあをそも〳〵ゝ床はゝあらねば（夫）廿五 好忠「うばをくゞあさなにきざむ松の葉ゝ山の雪はやうづもれぬらん（源えし姫）十五 うもをくをゞおこをふ山のふゝき心云々（翻譯名義集）一五 十三 優婆塞肇曰義名信士男信士女（後漢書）名伊蒲塞注云即優婆塞也中華翻爲近住言受戒行堪近僧住也（文德實錄）六 十 七月乙巳備前國貢二伊蒲塞 補（好忠集）「河上やゝさぎの岩やけを寒ゝ苔をむゝろとあらはうばをく

うはをめ（堀次）仲實「柞もら露のゝらもひさゝつれば時雨のあめぞうゝ染ゝをる

うむづゝこ（源みをつくし）十七　うむづゝこざりをみ廿奉り給ふ

うゐかり　後妻（古事記）中上　宇破那理賀那許波佐婆（神武紀）七　宇破奈利（十訓抄）十七　呂后と聞えゐる后ゐ戚夫人といひけるうむなりをとらへて

うはかりこかみ　後妻前妻（大和物）（檜垣嫗集）此うゐなりこかみひと日ひと夜よろづのことを云ゐたらひてつとめて船よのりぬ今ゐをとこもとのめゐゐへりかんとて車よのりぬ（和名）二　後妻和名字波那利　前妻和名毛止豆女　一云古奈美　補前妻後妻ヲナヲベテイヘルトコロニノミうゐかりこかみトナラベイヘリ

補　うゐなざら（堀初）氷室河内　「とけねどもうゐなざらなる人ゐとよ名ゐひむろよて下ゐこゑれる

うむかみ（夫）十七爲家　「いむかこのおもをわくるやま川のうむかみこゑるふゆのあけぞの　補（續古）戀一野宮左大臣　「かゆろふのいたがきぶちのゑにへりうむなこさゝぬものをこそおもへ（万代）雜三爲家　「いりうこのせとれさきかるるかいむまうむかこえてあるゝーゑかせ（續古）雜下後定　「もませぞもあさき瀬よたつうむかこのーづめゲたゑゐこゝろなりげり（新後拾）夏爲相　「みかと川うむなこむやくゐつかえてーゑまでよでるさみされのころ

補　うゐら（好忠集）「なつゐーくてよいをらねど山賤の垣ねのうゐら花咲にけり

うむむーろ（源夕かほ）卅三　うゐむーろよおーくゝこて云々いとさゝやゐよてうとまーげかくらうさげかり（同わかな）下九十四　御ーとねうむむーろ屏風云々　補（空穗吹上）上廿八　おもーろきーとねうゐむーろきかべてきんざちつきかこ給へり（同藏ひちき）中十五　たゝこよゐこんわこをこもよむらさきのうらつけてからのよーきのむーさーゑろきあやをむーろよゑたりゑとねうゐむーろゐ例のでとそのこゐもかくーこり

うゐのそら（源夢のうきはし）一中十　やどりいとよかりぬべけれどうむものそらよて物ーたらんこそ猶びんかゐるべけれ（同薄雲）川づらのをまひいとゞ心細さまさりてうゐのそらかる心ちのこーつゝあゐーくらを（同みをつくし）十八　「おーかへてたゝくゝひなにおどろのゐるもの空かる月もこそいれ（同夕かほ）廿三　「山の端よこゝろも知でゆく月ゐうもの空よて影や絶ぬん（堀太）歸鴈信國　「もる毎よゐうゐの空かるこゝろよて物わをれせぞ歸るかりのね　補（新古）戀四西行　「月のこやうゐの空かるかこみよておもひもいでゞ心ゐよむ（同）戀三宮内卿　「きくやいゐゐうゐのそらかる風ざよもまつよ音をるならひありとゐ（著聞）十六四十四　世よゐうゐのそらかるやうよ候へど

も云々うもの空よりおりゆれども

うもぐもり（枕）九、十。風ハノクタリ　いとときぬのうゝぐもりたるよ朽葉れ云々。ヨキ紅ノクロ

補　うゝまさら（好忠集）「うゝまさら今朝霜ヲカ　も閨の見えつるゝうべおそよゝよ袖ゝ

ミタルナリ

さえけれ

うゝけ（新六）二、一（夫）八衣笠内大臣「さゝたれのひまかき頃もさをしかのうゝ毛のゐゝ

くもらざりけり補（興風集）「浮てぬるかものうゝ毛よおくしものきえて物おもふ

ころにも有のな（玉葉）夏仲正「川風ようゝけふかせてゐるさぎのすゞしく見ゆる柳

原ゝか

うゝふゝ（蜻蛉日記）一、三　又内侍のかんのとのよりとひ給へる御返りに心ゑそくか

きかきてうゝふゝよ西山よりとりいたるをいとゞ覺しれん又ある御返りよ鳥羽の

大里よりとあるをいとをゝしと思ひれんも云々補（日本紀）題ウハフミ

補　うゝでぼり（千載）雑上清少納言「うゝでぼりあゝよ結べるひもあればかざにひらげよ

ゆるふゝりぞ（後拾）冬長算「かもめこそよゞれよけらしいかのなるこやの池水う

ゝでゐりせり（重之集）「うゝでゐりとくるかるべし山ゝげのいしまのゝ水音まさ

るかり

うゝて（夫）廿一公朝「わたのべやゝしのうゝてをもゝめにておほゝるゝちれつまやし

ろゝか（同）八爲家「さゝされゝ岸のうゝてよ舟つけてかぎさゝそのよどの川みつ

（同）同九條内大臣「草われてもゆる螢やいとがきの波のうゝての夏のさわらび

うゝぎ（枕）二、九上ハ。女ノサ着マニ　こきひとへゝさねよ二藍れ織物そゝうれうを物のう

ゝ着かどよて補（月詣）旅賀茂重房「木のゝちる立田の山のからよしき行ゝふ人のうは

ぎなりれり

うゝめ（夫）卅五西行「いちこゆるうゝめ女のかさねもつこのてがしゝよおもてか

らべん

うゝゝらみ（枕）色ノサメタルヲ云　（源末つむ）廿五　ゆるしいろれわりなふうゝゝらゝさるひとか

さね

うゝひ（古事記）上、十四　欲奪我國（神代紀）上、廿一有奪國之志歟（賴政集）上閏四月卯花「あ

やめ草ふくべき月と卯のゝものうゝひてかやもさくゝとぞゝる（家持）十二（万）五（風

雅）「雪れ色そうゝひてさける梅花今さゝりなりゝとん人もゞか（源竹川）廿一引のく

ををさかめりとゝてうゝひとりつ（同東や）十五あこの御けさう人をうゝゝんとゝ給

ひねるゝおほけなく心をさかき事云々

うへひも（好忠集）夏ゝうゝひもさゝで風まむのひ（補）（同）一なつゝ〜く吹くる風まはかられてうゝひもさゝでくられにころかな

うへも 表裾（神祇式）二、六 表裾一腰

（補）うへぎり（拾玉）七「山吹を分行人の衣手や春のかたゝの露のうへぎり

うへ 筌（和名）十五、四 筌和名字書 捕魚竹笱也

うへ 上（源玉かつら）廿一。夕顔ヲうへおむ〜まをや（同同）三十。源紫ヲサシテ聞え出んも

まど上まきこの世奉らでとりわき申たらんと後まま聞給ひてゝへたて聞えけるとやおやさん（同同）三十一 うへもと〜へぬるぞち打とけもぎゝもさむつかりたまもぎとや

（同同）廿四 大貳の御さちのうへの清水の觀世音寺まま參り給ひ〜いきをひゝ（同同）廿五

。紫ヲサシテ殿のうへの御かさちまま似る人おもせどとなん年頃見奉るを（同よもきふ）

十さけう世をおやゝ宮上あどのおもせ〜時のまゝまあらひ給へる御心あでりけい頭中將也

とやゝきことゝ。宮ハ常陸ノミヤナリ上ハ北ノ方ヲイフ（枕）四ノ。留守セシ清十三。ノ從者ガ詞 よるいまどう人のた

たかせ給ひ〜からうどておきて侍り〜かゞ上にかたらばゝくあんとの給ひ〜かど

も云々（源わかむ）卅七 君ゝうへをこひ聞え給ひてあきふ〜給へるゞ（同きりつぼ）三十七

上も御あみだのひまあくあがれおもゝ〜まをを帝ヲ申ス（同同）十四 上もあかあん我御まゝ

ろあがら 是も帝をヤす（榮歌合）十一 内大臣殿ゝ故院の御いもうとの女二宮をぞうへまてお

もゝ〜まに

うへ（源帚木）十二 うへゝつれあくまをさをつくり心ひとつまおもひあまるときゝ（同

よもきふ）廿三 忍ふ草まやつれたるうへのまるめよりゝまやびかまをもゝるを（後撰）戀五

「蓮葉のうへゝつれあきうらにこそものあらがひゝつくといふなれ（奥儀抄）をすゝあの

うへ 宮中ヲ云（源末つむ）卅二 又の日うへまさふらへば（古）秋上 秋たつ日うへのをれこども

かもの川原まま川逍遥〜ける（同）寛平の御時七日の夜うへまさふらふをのこどもま

歌奉れと仰られける時云々（源桐つぼ）廿四 うへまさふらふ内侍のをけ

うへ（源帚木）八 さまゞ〜の人のうへどもをかさりあもせつゝうちそゝめきていふ

ことを聞給へば（同同）三十六 わが御心あるべ〜（同あけまき）をづゝらの御上ゝ（万）

廿五 「むら鳥の朝たちいまま〜君がうへゝ（同）にきゝつおもひ〜でとく（源夕か

十三 ゞ）五十一 もらさゞと思ひ給へば若君の上をぞまえきこの世（同をとめ）廿二 よからぬ物の

うへまてうらめ〜とおもひ聞えさせつべき事の出まうできたるを（同梅かえ）十八 此

御いそぎを人のうへまて聞給ふも（同わかむ）上百 人々花のうへもわをれてまりまま心

いれたるを

うへ（後）雑一千里「あげれての世をもたのまぢ水のうへのあさよきえぬるうき身とおもへば（拾）戀二、よみ人しらす（六帖）「霜のうへよ降初雪の朝氷とけぢも物をおもふころかな補（万）廿五十「たらまとの秋野のうへのあさ霧よつまよぶをしらいでさつらんかな補「うへ」此上其上かといふ意（風雅）雑下院御製「もとよりのさながら夢と見るうへよりやかならぢさめもさめぢも

うべ（竹取）六火よやれぬ頃よりもけうらなること限りなしうべかくや姫このもしげり給ふよこそありけれとの給ひて（貫之集）上四「さくらぎりちらでもてぬる菊のもなうべしも千代のよもひのぶらん（伊勢集）十三「水上とうべもいひけり雲ゐよりおちてくるともそゆる瀧ゐな（小大君集）二十「よそおりし袖もやひぢしうべこそこゝよ涙のとまらざりけれ（後）春下元方「一とせよふたゝびさかぬ花なれいうべちることを人いとひけり（後）秋上（菅万）「俄よも風のそゞしくなりぬるこの秋たつ日というべもいひけり（源空蟬）四うべこそ親の世よなくゝ思ふらめとそのしく見さまふ（源さかき）四十五うべも心あると（いせ物）十六段「これやこの天乙羽衣うべしこそ君げそれしと奉りれ（催馬樂）此殿いうべもとみれり補（大和物）「をる人の心よか

よふ藤むかまうべいろことよにそひさりけり（拾）雑秋能宣「かへりよしし鴈ぞなくなるうべ人ゝうき世の中をそむきゐぬらん（万代）冬家有「木葉ちるうべ山風のあらしより時雨よ成ぬそねのうきくも

○うべもなく（蜻蛉日記）四さればよゝもしものを幸ある人こそ命ゝつゞむれと思ふにうべもなし（同）三うべなき事よてもあれる哉（同）三こと人の上よて問ハそれゝうべもなし（同）同方ゝいづくゝふたがるといふよかそふれいうへもなしよなたふたがり（同）二おとしまれ〳〵といひつゞくるを云々近くなれば人ゝなるをのこども中門おしひらきてひざまづきてそるようべもなくひきもぎぬ

うへゝ（土佐日記）海ぞくむくいせんといふなるあとを思ふうへよ海の又おそろしければ（古）雑下たゞさ寛平御時云々「なよ竹のよながき上よもつ霜のおきるて物を思ふおろかな（同）冬よみ人しらす「ぬが吐よまたもふりしれ春がそこたちなばを雪まれよおそこめ（落くぼ）二はらそあなひたる上よ衣いとうそし（源手あらひ）六十四水をのぞき給ひて云々うへよのやり給ひて柱よかきつれたまひし歌云々（同末つむ）三十四むかひさる廊ゝ上もなくあばれたれば

うへわらゝ源椎ゐもと）七御供よさふらふ人わらたのそかしきして奉り給ふかく

いふ宰相の君など（同わけはき）四十二　あと〳〵ゝき御使ゝもあらぜ例奉れ給ふうへ
わらゐあり

補 うへゝ（風雅）雜上宗長「松蔭の水せき入て住よゝの岸のうへ田ゝ早苗とるあり

うへつかね（源かけろふ）三十八　かりそめに水丁なぞむかりへどて丶打やもむうへ局
ゝゝさり（同桐つぼ）五　後涼殿ゝもあよりさふらひ給ふ更衣のさうゝをやかゝようつ
させ給ひてうへつかねはたまてす

うべな（古事記）中四十一　宇倍那云々（仁德紀）宇倍儺々々（万）十三廿長歌いのなるや人の
子故ぞ通ともあうべな〳〵母ゐあらせぞうべな〳〵父ゐあらせぞ云々○契云々
ゝもといたんがでとゝ父母にあらせぞ通ふかれば人のいぶるゐあか有べき
をなりといへり（神代紀）五　注諸此云々　宇毎奈利（續紀）宣命　天地乃宇倍奈弥由流之天

補 うべ〳〵ゝき（枕）五八云々　花きはやかゝ重なりて咲さるうべ〳〵ゝき所のせん
ざいにゐよゝ

うへの（伊勢物）十八段「くれかゐに匂ふがうへのゝら菊ゐをりはるひとの袖かとぞ
見る

うへのたかま（源ゐふひ）五　ゐさがさねの色上のたかまの文馬くら迄ゐあとゝのへ

たり

うへのおろも（源手あらひ）四十八　僧都手習ニ　わが御うへの衣けさおどをてとさらむか
りとてきせ奉りて

うへのきぬ（源花のえん）十二　櫻のゐらの綺の御直衣えび染の下がさね尻いと長く引
てみな人ゐ上のきぬなるにあされさる大君姿のかまめきたるにていつゐれ入り給
へるさま〻ゝいとあとあり○花鳥御幸ノ巻ニゐとけなき大君姿トアリ然ラハシト
ケナキ心ニヤ常ノ袍ニ指貫ヲ着シ裙ヲヒクハヨノツネノヿナリ直衣ニ裙ヲカクル
ハシドケナキ出立トモ云ベシ

うへや（枕）四十三　上屋　御佛名のあゝさ地獄畫の御屏風云是をよかゝと仰らるれぞ更ゝ
ゝ侍らゞとてゆゝゝさゝ上屋ゝ隱れふゝぬ（傍注禁中ニテ清少ノ局ニヤ）

うへぶゝ（平家物）二十八　其夜ゝも院の御所法住寺殿ゝうへふゝゝていまだ出られざ
りはるゝ（弁内侍日記）上「こゝのへの雲の上ぶゝ袖さえてまどろむ程の時のまも
おゝ（著聞）六九　上ぶゝよりいまだ裝束あらさめぞゝてみたゝのもとまでひとり花を
おがめられけり 補（著聞）十八　たゞ今うへぶゝゝて候つる此ていゝてゐいかゞまる
り候べき

補 うべー（万）六、一 うべー神代ゆさだめけらーも（同）同四十 うべーらにらー（貫之集）「咲りぎりちらでもてぬる菊の花うべーも千世の齢のぶらん

うーる 上下。衣服云（六帖）五「紅のこそめの衣下ゆきん上ゆとりきべーるゐらんかも（源紅葉賀）廿八 歌かくゐころぶる中の衣に上ゆとりきべるゐらんといふ

補 うべーこそ（拾）春貫之「野べ見れべわかなつみけりうべーおそ垣ねの草も春めきゆけれ（新續古）秋下「身にさむく秋風ふきぬうべーこそ衣かりがねはさハなくなれ（万）十九十「よくざちてなく川千どりうべーこそむかーの人もーぬびきゆれ（貫之集）「かたらぎも見ゆる松かなうべーこそ久ーき事のためーかりけれ（續後拾）春上 棟梁「色あとゆさける梅がえうべしあそをる人がらの袖ゆーむらめ（新千）秋下 公藤「秋もぎの花ちるかせのさむけきにうべこそ鹿も妻こふらーも（万）十五十九「あら山のそねかほきらふうべーこそまがきのもとの雪いけぎけれ

うへびと（源桐つぼ）十八 此ところの御けーきを見奉るうへ人女房かぎかたいらいたーときゝけり（同帚木）廿二 あるうへ人きあひて

うへもなく（續千）賀 今上位ゆつかせ給へりける云々「あきらけき御世ぞーらるゝ位山又うへもなく仰ぐひかりゆ 女藏人 万代

うとからぎ（源末つむ）廿六 うとからぎおもひむつび給ちんあそほいあるあゝちをべれれ

うとー（源若紫）四十八 うときまらうどかどの

うとむ（神祇式）祈年祭三 蹉夫留物（源桐壺）廿五。御門の詞 かぎりかき御おもひどちゆてかうとゝ給ひそあやーくよそへ聞えつべきあゝちかんをる（万）十一、廿七「横雲の空ゆひきあーとほゝあそめでとかるらめたゆとへざつや（古）夏（伊勢物）四十三段「そとゝぎにかがなく里のあまたあれべ猶うとまれぬ思ふものから（源夕かほ）四十九 えうとみもつまトきさまもーたりーかな（大和物）「ゆゝーくもおもそやるかな人でとゝうとまれにける世にこそありけれ（源帚木）廿 さかかくやるーなこのりーも我をうとゝねとおもふかたの心やありけん（同）十八 此人ゆみやうとまれんと 補（万代）秋上 隆信「詠れべかかーさものとーりかがらかぶうとまれぬ秋のゆふぐれ（同）春下 俊成女「さはべちる花のうきよとおもふゆも猶うとまれぬ山ざくらかな（敦忠集）人ゆうとめられてかへりでとせぬ人ゆ

うとんくゑ（方便品）譬如優曇華一切皆愛樂天人所希有時々乃一出聞法歡喜讃乃至發一言則爲已供養一切三世佛是人甚希有過於優曇華

うとんぐゑのはな（夫）廿九、待賢門院安藝「玉椿光をみがくきさげ世よもゝかへりさくうどんくゑのはな（土御門院御集）「うどんぐゑの法の花よもあひよけり菩提の種を植てける身ゝ（源わゝ紫）十九「うどんぐゑの花待えたるこゝちしてみ山さくらよ目よそうつらね（翻譯名義集）三七、卅優曇鉢羅此云瑞應般泥洹經云閻浮提有尊樹云名優曇鉢有實無華優曇鉢樹有金華者世乃有佛施設論云繞瞻部州有輪王路廣一踰繕那無輪王時海水所覆無能見者若轉輪王出現于世大海水減一踰繕那此輪王路再乃出現金沙彌布衆寶莊嚴旃桓香水以灑其上轉輪聖王巡幸洲渚與四種共俱游此路此華方生新云烏曇鉢羅

うと〳〵〳〵く（源よもきゝ）十三おのれをもおもてぶせなりとおぢ〜捨たりしかばうと〳〵〳〵きやうよりそめ〜かど（同帚木）四十五もてもなれてうと〳〵〳〵う侍れば世のさとひよてむつれ侍らぢ

うとまゝ（源末つむ）十四あれたるまゞきのはどうとまゝくうちながめ給ふよ（同あかし）六やけのこりたるかさもうとまゝ少にそおらの人のふとゝとゞろこのゝまとへるよ（同桐つぼ）廿四うとまゝうのゝよろづにおぢ〜成ぬるよ（同花のえん）五あいたそとの給へどおよかうとまゝきとて補（金葉）戀下、よみ人しらす「うとまゝや木のゝた陰のわ

それ水いくらの人のかゞをそつらん

うときひと（源帚木）十日よもゝ耳よもとまるあり樣そうとき人よわざとうちまねをんやゝ（同同）十八うとき人もみえぬおもてぶせにやおもいれんと

うち禁中ナリ（源夕かほ）三十四うちより御つかひを（同桐つぼ）二十今いうちよのみさふらひ給ふおゝつよなり給へど（同わか紫）卅一れいそる所ゝ六條京極わたりよて内よりあれがすこゝろどとゞきこゝちそるよ

うち簾中ナリ（源竹川）十二内より和琴さゝ出たり（同）十三内の人のかへゝ補（金葉）連歌「見わさせば内よも戸をばたてゝけりおくなるをもやはゝらといいふ

うち。年のうちよ、月のうちにといふうち也（源わかな）上、四十九院のみかどゝ八月のうちよ御寺ようつろひ給ひぬ（古）春上ふるとゝよそる立ける日よめる在原元方「とゝのうちよ春ゝ來よけりひとゝせをこそとやいもん〳〵とゝやいもん

うち（源わかな）上、八十七此御願文ゝ云々此内のおとどもゝいせさせ給へ（月清）上「外ゝ夏あさりの水ゝ秋よゝて内ゝ冬なるひむろ山かな（源わかな）上、六内の御ことゝかの御遺言たがへぢつかうまつりおきてゝかば補（源梅かえ）五うちの事おもひやらる御文ゝかな文中也

うちは　今ィっ内、間ナリ（源玉かつら）四さるべき使もなきうちは（同うき舟）廿七おもしまさんあとといとわりなくある内はあゝにもめのといとさゝれればかゝるべきよしを聞ゆ（蜻蛉日記）一歌云々などいふ内よりあほもあらぬことありて春夏あやくらしつ（空穂國ゆつり）中七十八よそはもかれおいしまをある内は（同俊かけ）七十五今ゝましてかけても覺え侍らぬ所の内はふの御あるドに仲忠ゲ手つゝうまつらんゝ蓬の野べは蛙の聲をる心ちおんつかうまつるべき（源玉かつら）あとは出てゝ何らゝかぞへの内はゝ聞え給ゝん（空穂藏開）下廿四世の中のつねあらぬ内にかくゆく先もをくおくある心ちをるは（同吹上）下、十九年廿歳より内の人十人云々年十五歳より内たれひとしく姿同しき十人（同あて宮）二おとゝ四十人云々年廿余の内わらゝ六人五位の娘十五歳のうち（落くぼ）一、廿七おもふひもかはぬ事おればいとこゝろうくおもふうちにいといとゞはなるもこのまゝ有樣はてゝえぬるあを

うちにも（源さかき）四十七あゝろとけたる御聟のうちはもいれ給もぎ（榮）四、四十一よからぬあとのうちに入さり（源みをつくし）初大きさき猶御なやゝおもくおもします内はもつひは此人をえけたぎなりぬるあとゝ心やゝおぞしけれと（蜻蛉日記）四さる内にもいまやけふやとまたるゝ命やうゝ月たちて日もゆれば云々（同わかあ）

下四十六そゝれ〳〵うゐりて侍れども其内にも參りていとよく聞しめさせ侍りかん補（古）序いにしへよりかくつたゝるうちはも奈良の御時よりぞひろまりはける

うちは（源わかな）上、九廿ゲ内はゝ納言はもあらぎりにきかし

うちいで　打出（拾）戀五、よみ人しらす「近江おる打出のむまのうち出てうらゝやせまし人の心を（源とこ夏）三めづらしきことゝて打出聞えん物語もおぼえねば（十訓抄）八、寢殿の南面は紅の打出と三間は出されたり（源ぼたる）五打出ておもふ心の程をの給ひつゞけたることのゝ（同わかし）十五わがおもふことと心のまゝはもえ打出聞えねば（同帚木）四十五妹の君のおとものくもしくとひ聞給ふ云々もづかしゆはづまりされゞうちいでまくし（伊勢物）四十五段いかで此ゝとおはものいそんとおもひけりうち出んことかたくや有れん（竹取）十三かくや姫なく〳〵いふさきゞも申さんとおもひしかども必おゝろまぞはし給もん物ぞとおもひて今迄過し侍りつるおりさのゝやゝとて打出侍りぬるぞ（源わか紫）十七おとなゝしうもづかしゆあるにつゝまれてとゝわもえ打出給ゝぎ（同同）十七かゝるをり有がさうなんおやされん所をも憚らぎ打出侍りぬると聞え給へば（同うす雲）廿、云々とたかり奏しさしてえ打いでぬことあり

○うちいだし　打出シ（枕）七、九酒のゑ詩ぎんしゐなどをるに頭中將たゞのふの君月秋とき
して身いづくゝのといふおとゝ打出し給へりしかゞ（同）六ノ十八。初瀬ノ所　經高くゝ聞え
ぬほどゝよゝとゝるもたふとゝゞあり高く打出させまほしきにまして鼻おとをけざや
かゝ聞ゝくゝいあらでもこし忍びてかゝたるゝ云々（同）六ノ十九又三ツばかりある兒
のねおびれて打おもふきたるゐもそひもうつくしめのとの名母など打出たらんも是
ならんといとおらまゐし（同）六、廿其寺の佛經をいとあらゝゝう高く打出てよゝた
るゝ（源ゝもきふ）十八いりてせうそくせよゝくたづねよりてを打出よ人たがへして
いをこおらんとの給ふ

うちと　團扇（夫）九、右衛門佐「おつの夜ゝ光りすゞしくそむ月を我物顔ゝうちゝとぞゝ
る（同）九、頼綱「夏のよの月ゝる程のをゞしさゝうちゝの風もれふぞたゞもぬ補（空
穂國ゆつり）上六、十七いとあつしとのたまへゞうちもまゐらせむとのたまひて（輔親
集）ある僧のゝおづきのゐかゝせたるうちもゝ天のもし立のゐたかきて（公任集）
ある人うちもの繪ゝさうびきんといふ事よませ給ふれるゝ（濱松）一上びんづらゆひ
ゝるわらものうちゝもちたるうしろのこのたに（同）同女をら五十人をこのりいゝどう
さうぞきてかみあゞうちもさしつゝはしらでとまひとゝもしわたしてゐみゐたり云々

うちもをてまさぐりゝして

うちもへ。契云長キ心ナリ（空穂藤原君）此ころ殿に參りこんとをめるをうちもへ物忌ゝ
てなん（枕）五、廿七雨れ打もへ降頃けふもふるゝ云々（大和物）一「青柳のいと打もへ
てのとかゐるもる日しもこそ思ひ出けれ（古）雜上貫之「咲そめし時より後ゝ打もへて
世ゝ春かれや色の常なる（同）秋上躬恒「七夕ゝこのしつる糸のうちもへて年のをゐがく
戀やわたらん（同）戀一、よみ人しらず「いせの海の海士のさく縄打もへてくるしとのゝやお
もひわたらん（後）春下、深養父「打もへて春ゝさをかり長閑きを花のまゝろや何いそぐ
らん（拾）雜（六帖）貫之「松風のふかん限りゝ打もへてたゆべくもあらぢ咲る藤おゝ
（空穂ゆて宮）十斯てあて宮參り給ひて又人有ものとも知り給もぢ打もへまうのぢ
り給ふ（同國ゆつり）中三、十三殿ゝ打もへ物しし給ひて兵衛の君かたらひ給ひしときゝま
れを使ゝてぞ御ふをかゝよもし給へゞ（同同）上廿七。宮より文詞日頃ゝいゝゞ打もへこゝ
ゝいなやましうおんあれゞまざえ對めんせぢやとおもふゝ（六帖）三「いせの海の
波間ゝくゞす釣のをの打もへひとり戀わゝるこのお（拾）十三（貫之）廿四「床夏のむおを
しみれゞ打もへてもぐゝ月日れ數もしられぢ（躬恒）下三、十五「打もへてやもきいもね
ぢきりゝゝゝ秋の夜おゝゝ鳴つゝぞふる（同）同卅五「打もへてゝむめる人ゝ七夕の

逢夜をかりいかーもせよのー（家持集）廿一「天川々瀬の波のうちもへてわがさちまちーにふぞきまける（躬恒）下、四十一「あるにのをもえわたれども打もへてわがおもひそびにつ人もあー（家持）廿二（後）秋下、よみ人しらす「うちもへて蔭とぞ頼むそねの松色ぞる秋の風まうつるな（万）六、四十三やそとものをのうちもへて里あをーけば（源手習）十六打もへぬるみあどー給へるこゝろざめ給ひて補（古）夏、よみ人しらす「あーびきのやまゐとぎにうちもへてされかまさるとねをのをぞあく（後）夏、よみ人しらす「うちもへてねをあきくらにうつせみのむあーき戀もわれいをるかな（後拾）戀四、範永朝臣女「うちもへてくゆるもくるーいかであれ世まををがまのけふりたえあん（新勅）冬、讃岐「うちもへて冬いさをかり長きよまは猶のこりをる有明月（新古）夏、攝政太政大臣「小山田にひくーめ縄の打もへてくちやーぬらん五月雨のころ

うちもらひのもと（江次第）七、廿三上卿取打拂筥進神殿方前跪奉之

補　うぢもやき（詔詞解）五、二如此久宇治方夜伎時仁、うぢはやきいいちもやきともいひ頭のいを省きてちもやぶるともいへり云々

うちもやーて（枕）七、一。女院ノ御サシキニ齊信ノ宰相中將ノ來ル所宣旨ハ御使まして云々馬をうちもやーていそぎ參りてをあーー遠くよりおりて云々。注早メテ也

うちいまゐる（枕）五、二御うちいなどまゐり給へば（狹）一、十五上くるーくおそえ給いゞ何かいまゐり給ふうちもおどせさせて物ー給へらー

うちもぶき打羽振（躬恒集）下、四、十一長歌足引の山まをむらん鶯ハ云々もねうちもぶきとびをぎて云々（猿）十一（古）「五月まつ山ほとゝぎゝ打もぶき今もおりおん去年のふる聲（同）同（同）「たゞをそぎゆふつけ鳥りから衣立田の山に打をふきおく（家）十八（万）十九「打もふき鳥いおゝとも斯ぞり降白雪まは君いませめや（後）雜一康明朝臣中納言まは成侍りゝる時うへのきぬ遣をとて歌云々返し「いまーへも契りてけりお打むぶき飛立ぬべー天の羽衣

うちもめ（空穗蠟ひちき）下、廿一いとあやーきさまにのを侍めればさいひて打もめてのを侍らんやいとて心まをるがひて人々まくだり給ふとなん侍りー（落くを）一猶ありゝせそめどうちまこめてをきたるぞよきとて。或云打ステ物ノ數ニモ入ザル心ナリト（土佐日記）下ほとゝーく打もめつべー云々まおおもこそふさつあれたゞひとつある鏡をたいまつるとて海に打もめつればいとくちをー

うちはー打橋（万）十打橋度公之來爲（源桐つぼ）五うちはーわたどのこゝかーこの道まは（同夕かは）十四うちもーだつものを道まておんかよひ侍り（万）十三「はたものゝ

ふそぎもちゆきて天の川打橋わさを君が來んため（榮花山）十一御門のわさらせ給ふ
うち橋などよ人のいかゐる業をしさりれるよりわれものゐらせ給もを上もわたら
せ給いを（枕）六三。后ノのゐらせ給ふ道のほども殿のさるがうでとにいそぐく笑ひ
てゐと〳〵うちはしよりも落ぬべし（神代紀）下十三又於天安河亦造打橋補（万）十七九
長歌かそつせに宇知橋わたし云々

うちいもる（枕）十二七。加持僧ノ所せうとのうちきしさるゐを冠者どもなどのうしろに
ゐてうちいもるもあり補（同）うちもおどせさせてものし給へかし

うちどの打殿（源玉かつら）四十三こゝかしこのうちどのよりまゐれる物ども御らん
ずくらべて（河海）裝束うつ所也うち殿むりどのなどゝてあり

うちとのふそ（夫）卅二、權僧正公朝「なよとして内外れふみをまゐびけんまくものぶるも
物うかる世に

うちとのそや内外の宮（新古）神祇後惠「神がきや玉くしれ葉をとりかざし内外の宮よ君を
こそいのれ補（新後拾）神祇、後九條前内大臣「世のためよさてし内外の宮柱たかき神路の山
いろでかど

うちとけ（源末つむ）四うちとけさるをみりよすゐ奉りて（枕）五七かたらいたきも

の、まらうとおどよあひてものいふよ奥のうたよ打とけどと人のいふを制せでき
くまゝち（同）一八まゝゐしもの人のそるまゞくやいおどかいさしもの打とけつるとわら
いせ給ふ（同）五七かたいらいさきもの、人のおきてものがさりおどそるかたいらよ
あさましうちとけてゐたる人（源帚木）三そのうちとけてかたらいさしとおゐ
されんこそゆかしれれ（同あかし）廿八かりよくざりさる人のうちとけどとよつきて
さやうよかろらりよかたらふわざそもをかれ（同末つむ）廿八さるりたのうしろそよ
てもぐゝまんとおもゐ！とりてさまおとよさおらぬうちとけわざもしたまひけり
（同帚木）十ひとへまうちとけたるうしろをさかりをして（同同）廿二此さげおものを
うちとけさるかたよて（伊勢物）廿三段いまいうちとけて（源帚木）廿九常のうちとけゐ
たるゐさまいもべらで（同紅葉賀）廿七五十七八の人のうちとけて物おもひなゐおる
けもひ

うちとけぬ（源桐つぼ）廿いとをかしうちとけぬあそびくさに（拾）春源順「氷ざよ
とまらぬもるのたにかゐよまたうちとけぬうぐひそのこゑ

うちとけわさ（源末つむ）廿九さまことよさならぬうちとけわざもし給ひれめ

うちとけかき（源さかき）卅そちのくゐ紙ようちとけかき給へるさへぞめでたき

うちとけまさり（源末つむ）廿四　いかようぞうちとけまさりのいさゝかもあらばうれしからんと

うちとけふみ（源浮ふね）六　何かゝその女どもの中にこのきこのよはゝさらんうちとけ文をゞ御らんせんとの給ふを

うちとけをがた（蜻蛉日記）四　きよらの人有とておくまりたる女をのもとなどにうちとけをがさにていでゝみるに

うちわさり（狭）四中　卅八　内わたりの宮づかへよりもまづ〳〵とまゐりつどひ給ひつゝ（源帚木）廿　内わたりのたびねもをさまじかるべし

うちわたし（源やとり木）卅七　「うちわたしよりあるゝおきせき河ををれをめれん名こそをしけれ（細）オシナベテ大方ナルト云心也

補　うちわさを（万）四　うちわたに竹田の原に云々（古）旋頭歌　うちわたををちかた人に物まうを云々　記傳三十六五十三ニ説アリ

うちをび（伊勢物）五十八段　「うちをびておちゞひろふときゝませゞ我も田づらにあるまーものを

うちゐへし（源うす雲）七　いと心ぐるしけれをうちゐへしの給ひあゝを（同かしい木）三　まついしーあらひ給まーかたの哀も出きあんなどつれ〴〵におもひつゞくるもうちのへしいとあぢきなし（同桐つぼ）十四　さきの世ゆかしうなんとうちのへしつつ御をゞされがちにのこおもしまを（同夕かほ）四十四　かゝるべきちぎりまこそれもの給ひけめとおもふもあれまおん又うちかへしつらうおゞゆる（同浮ふね）七　うちかへし〳〵あやしと御らんゞて（同末つむ）廿二　うちかへしまさりをるやうもありかし

補　うちかた　内方（貫之集）延長四年きよつらの民部卿六十賀つねすけの中納言の内方せられける。人の妻を内方といふもふるき事也

うちかさり（源まき柱）卅九　おのづから事にふれてうちかさり

補　うちかぞへ（新古）雑下　慈圓　「世をいとふ心のふかくなるまゝに過る月日を打かぞへつゝ

うちがみ　氏神（源みをつき）八　人の御娘とてこもりおもをるほどゝ必しも氏神の御つとめなどあらゝおらぬをゞおれゞこそとし月もまぎれをぐし給へ此もしおゞしよることもあらんまゝ春日の神の御こゝろたがひぬべきを云々

うちかひ（新六）三　「いづくりもくざる小舟のうちかひまあさせぞしるき行あやみ

つゝ

うちよなれ　打世　訓（源こてふ）廿二　うちよなれさる人の有さまをゞよ見をり給ハねバ

うちよゝ（源帚木）廿一　うちよみはゝりゞきかいひくつまおと手つき口つきをかたゞ〳〵からぞ

うちたれがみ（堀太）柳匡房　「さほひめのうちされゞゝの玉柳たゞもる風のけづるかりけり（源手習）廿五　おべてのさまゝいあるまゝかりつる人のうちされがゝのみえつるゝ○宣長云タヽヨノ常ノ女ノ髪ノ丁也此所ハ尼ノミ多クテヨノツネノ髪ナルハメツラシキ故ニワキテカクイヘルナリ（拾）夏躬恒　「ほとゝぎゝをちこのへりかけうかゐあゞうちたれがみのさゝたれのそら補（續千）雑体頼政　「青柳のうちされがゝをゝせんどやいづべき門にまちさてるらん（新千）春上後京極　「谷川のいもねかたゝく青柳のうちたれ髪をあらふゝらかみ

うちたのむ（源帚木）九　わゞものと打さのむべきをえらバんまおほかる中まもえかんおもひさだむまゝかりける補（玉葉）戀一素性　「うちたのむ君ゞ心のつらからバ野まも山まも行かくれなむ

うちたのめる（源帚木）廿五　うちたのめるけゝきもえき

うちさえ（源さかき）廿六　打たえて内春宮まもまゐり給ハぞ補（玉葉）戀六西行　「うちたえて君まあふ人いかなれやわが身もおおゝ世まこそハふれ

うちさて（落くぼ）二　鎖ひねりを給ふまも更まうでかねバたちもきをよびの給ひてうちたてをふさりゝてまちをかちてやりどをひきもかちつれバ（同）部屋の戸さふゝてうちさてもうちゝらゝけれバ（神祇式）四廿　鎖打立一枚頭徑一寸三分足長一寸五分足本廣一寸穴徑六分足廣七分厚二分半　莖長二寸

うちたゆを（源うす雲）十七　常の御かやをとのをうちたゆをたりつるを

補　うちそふ（新古）羇旅肥後　「さよふれてあゝの末こを浦風まあれ打そふ浪の音かな

うちつれ（源帚木）三　君の出入ゝ給ふに打つれ聞え給ひつゝ（同玉かつら）十　次郎をかたらひとりてうちつれてきたり

うちつゞく（源東や）十一　はるかかる所まも打つゞきて過ゝもべるとゝでろのそどまも補（隆信集）いもうとたちもあまたうちつゞきいできて

うちつけ　其ヽ（源東や）十四　少將心中ナリ　月でろ又かく云々といひつるものゝうちつけまかくいふも（同まはろし）八　山吹などのこゝちよけまさきをゞれたるも打つれまも露ねくのみ見かされ給ふ（同玉かつら）廿　三條をよバをれどくひものまも心いれてと

みよもこぬいとにくゝと覺ゆるもうちつけなりや（同帚木）二さゝもあざめき目なれたるうちつけのすき〳〵ゝさ（同同）卅九うちつけよふかゝらぬ心のそぞゝと給ふらんまとわりなれど（土佐日記）たゞ一ッあるかゞゝをたいまつるとて海よりうちもめつれゞいと口をゝされゞうちつけよ海ゝ鏡のおもてのごとなりぬれゞ（六帖）五下

「ひく琴の音のうちつけよ月かゞを秋の雪かとおどろかれつゝ（古）夏貫之「ほとゝぎすひとまつ山よりなくなれゞわれうちつけよこひまさりけり（貫之集）十一「吹かせよりなびくを花をうちつけよまねく袖ゝとたのゝけるゝな（同）十四「人ゝれぞ空をながめて天の川なゝうちつけよものゝそこそおもへ（赤人）二（万）十九「うちつけよといりゝはまねぞしめはへてもちまくおもへどもはゞめてもまづゝまそゝゝき梅のもつ花（古）物名「うちつけよこゝゝとや花の色をゝんおくゝら露のそむるばかりもの（朗詠）（後）秋上「うちつけよものぞかなゝき木のもちる秋のもゝゞめをゝふぞと思へゞ（古）哀傷「打つけにさびゝくもあるゝもみぢをもぬゝなきやどゝ色なのりけり（源わかな）下七十二いけるかひありつるさいもひ人の光りうゝなふ日よて雨ゝそそふるなりけりとうちつけでとゝ給ふ人もあり（蜻蛉日記）三北野よものすれゞ澤べよものつむ女わらゝべなどもありうちつけよるなぐつむかともおもへゞもそそ思ひやられてゝり（源手習）九尼ぎゝゝおやのわづらひさまふよりも此人をいけもてゝゝゝをゝゝてうちつけよそひゐたり（同わか紫）十三さづね聞えまほゝき夢をみ給へゝ云々うちつけなる御夢ものがたりよぞ侍なる（同同）十六此にうちつけなりとおそめき給ゝんもことゝりなれゞ補（大和物）「うちつけにまとふこゝろときくからになぐさめやにくおもほゆるかな

うちつけ（古）一、下（後）冬、よみ人「梅ゞえよふりおける雪ゝはるちかを目のうちつけよ花かとぞゝる（新古）戀五惟成「萩のもや露のけゝきもうちつけよもとよりかもる心あるものゝそ（注）さゝよりよ也サシアタリテト云心ナリ（源松風）十八めのと若君いざきてさゝ出たり哀なる御けゝきよかき撫さまひてゝていとくるゝかりぬべきこそいとうちつけなれ。ウチツケコクルシト也

うちつけゝさう（狹）廿一、上十三。女ヨリ歌マ井ヲセタルナリ何人ならん見ゝりたりつるよやとゝかりゝおそせどかやうのうちつけゝさうなどハわざとゝこゝろよもいらぜ

うちつけこゝろ（源手習）廿八うちつけ心ありてまゐりこんよだよ山ふかき道のうでとゝきゝつべゝ

うちつけめかと（源うき舟）十三。匂ノ親ノ所わらものゝかゝゝなるいとをぞよるこれゞ顔まづかのそかけよゝ給ひゝそれなり打つけ目のと猶うたがゝゝきに右近とかの

りゝわのき人もあり

うちつぎて（源末つむ）廿五ゐたけのたのうちつぎてあをかたもとみゆるものゝ御むかなりけり（同玉かつら）十八八幡まうでさせ奉る云々打つぎてゝ佛の御中にゝもつせをん日のもとのうちまゝあらたなるゐるゝあらゝゝ給ふと

うちならゝ（源をとめ）卅七御前まめゝて御らんせんうちをらゝまおまへをわたらせて と定め給ふ俗ニモナラシトイヘリ（同梅かえ）八あその御遊のうちをらゝまゝ御ことゞものさうぞくをどゝて殿上人などあまゝ參りてをかゝき笛の音ども聞ゆ

うちおらに打鳴す（千載）哀傷慶範法師「打ならそのねの音まゝや永き夜もあけぬなりとゝおもひゝるらん（源夕きり）七ふざんの經よむときかもりてかね打おらすまゝ

うちなく（伊勢物）四段うちなきて

補 うちなびく（万）一一廿あきの野まゝやどる旅人打靡（ウチナビキ）いもぬらめやも

うちゝ（源桐つぼ）十三云々おぢ内ゝまゝ思給へるさまを奏ト給へ（同やとり木）四十四とまかなる内々の事までいいかゞゝおぢゝよらん（同紅葉賀）六内ゝのありさまゝゝりたまいぎさもおぢさんことゝりなれど（同東や）七云々おおどことゝ内ゝまゝおもふともよそのおぢえおんへつらひて人いひおそべき（同同）十四されどうちゝ〳〵まこそらくおもへ外のおとぎゝゝ守の子ともおもひわかぎ（狹）一下十四うちゝのありさまのいとあやゝきを子おげらもいかゞゝ給ふらんともづらゝうおぢをおるべゝ（同帚木）七やんでとおきあさりの内々のもておゝけもひおくれたらんゝさらまゝいもぎ何をゝてかくおひ出ゐんといふかひなく覺ゆべゝ

うぢのおか（氏の中）（伊勢物）七十九段むらゝうぢのおかまゝこうまれ給へりゐり云々御おぢがたなりゐる翁のよめる云々

うちのおんかた（内の御方）（源東や）九、媒詞 此月頃内の御方（ヒタチノ北ノ方ヲサス）まゝせうそこ聞えさせ給ふを御ゆるゝ有て（河）内房ノ心ナリ

うちのみかど（源わらわ）下二廿内のみかどさへ御心よせことまゝ聞え給へば

うちおく（打置）（源帚木）廿おまゝがゝげおよぶべきぞどおらねばかみげかゝゝ打おき侍りぬ（同わかし）十三かきもやり給ゝぎうちおき〳〵おゝのでひつゝ聞え給ふ

うちくゝへ。（拍子ヲ打加へ也）（源まき柱）四十ものゝゝねおぞゝらべおつかゝきはぞのひやう打くゝへてあそぶ

うちくちぎさみ（源らしゝ木）四十四草はじめて青ゝとうちくちぎさひて

うちくひ（落くぞ）二一條のの大路まゝうちくひうまさせまへれば

うちまかせてい（大方一通り）（山家）下戀百首「けーきをばあやめて人のとゞむとも打まかせていいもゞとぞおもふ（同）「あゞのゝとつゝみーころい涙ざま打まかせたるこゝちやいせー（宇治拾）四十四すでは死おんとをる間弟子どもあやーみをおーて此病の有さまうちまかせたる事おあらぎおぞーめを事のあるこの仰られぎいよーなき事おりといふ（古事談）六京中ノ大路ヲモカク籠作ニヤト令申給ケレバ打任テハ不可有事ナレモ我等ガセムヲバ誰カハ可咎ヤト仰ラレケリ

うちまつ（打松）（源かゝり火）三うちまつおどろ〳〵ーのらぬをどまおきて○これいをり松をあやまりさる也をりまつの所まあゞつ○契拆松を寫ーあやまれるまやと云り補嘉基云落くを物語二まさい松のをきかゞまま云々とありさい松い拆（サキ）松にて今いふをり松也こゝもそれと同ぢくさい松おるべーをり松うち松ともに拆を拆とも打とも誤たる也廣足按うつをさかの院云々火をくらうおさんとて御さいまつもくらうおさせ給へり云々

うちまねく（源夕きり）四わらもものをかーゞおるいできてうちまねく

うちまゐり（參内也）（源竹川）七内まゐりより外のありきなどうひ〳〵ーく成まて侍れ

うちまき（うつを藤原の考）廿九我たためまちりをかりのわざをなむらへすともうちまきによねいるべー粃おてたねおさばおをくなるべー（榮っはみ花）加持まゐりうちまきしさわぐ（源よこ笛）十四いさくおき給ひてつたをなどー給へば云々うちまき散ーなどー〳〵てみたりがいーきま（箋）散米也補（宇治拾）十一、十八たちなみさる見物のものぞもうちまきをあられのふるやうま（濵松）わかぎをおびえていをどうおき給ふにひとゞ〳〵おどろきさをぎうちまきのおとおぞまぎらいーくおりて

うちまぜ（源とし姫）廿五ねんぞのついでまもうちまぜおもひ給へわさるおるーにやぬ日ぞなき

補うちふく（拾）秋、よみ人「秋風のうちふくごとまたかさでのをのへのーりれおり

補うちふす（堀百）「うちふさでおもひありさむ中々にねざむるたびまくるーりけり

補うちころを（大和物）四御とくおとーでろねたきものうちころーたべりぬ

うちあいぬ（源あけまき）卅一をべて打合いぬ人々のさりーらをまくーとおゞす（同帚木）七もとのーお此世の覺え打合ひ云々打合ひてすぐれたらんもおとりこれこそいさるべきおとゝ覺えて（同東や）六りたいらいいさう打合いぬさまをえ奉る事もやと（同）八されどさびーう事打合いぬをやびおのめる人のもて〳〵い（同玉かつ

ら）四十猶打合もぬ人のけーき見あつめん（同をとめ）八家よりもやりまもとめたるさうぞくどものうちあいぎりたくおーきをがたおどをも（同夕かを）廿三御かゆなどいそぎまるらせされどとりつぐ御まりおひうちあいを（同玉かつら）十九御さいおどうちあいでいとかたいらいさーや（同まき柱）十七御さうぞくの事おどもめやをくもおおー給いぎ世まあやーううちあもぬさまにのをむつかり給ふを

うちあいを打合。拍子（源わかな）下十琴也六ことまうちあいせたる柏子も

うちある（宇治拾）十五九やゝこれいうちある矢まもあらざりけり神箭なりけりといひて（つれ〜）十段すのこすいがいのたよりをかーくうちある調度も昔覺えてやをらかなるこそこゝろまくーとをゆれ（十訓抄）一八大方うちあらん人も情をさきとをべー（同）五七抑いもせのおからひいの偕老同穴の故ありてたぐうちある友にいおぎらへがさければ妻を求るまいい上薦いの品をもえらぶへー（同）九一廿をべてーりるべき所のみまかぎらぎさぐうちある人のもとまつのへおたがいん類迄も物でとまゝ執ー萬まつけて情あるやうにふるまふべー（同）何となくるまーかゝるいそのけぢめみえざれとも藝能まゝ付てめー出されたぐうちある我と下のあそびかたへまぬき出て何事をもーたらんいい雲泥のこゝちーて人のいをトう覺えぬべー（同）二九十かく度々にあるまゝ申さざればうちあるやうに思いせ給ふらんと世まわびーく候へば（同）十二四管絃の德神感の例粗りをまかりとりといへどもうちある事まつりておそ申べー（同）十九これいい世も今少あがり人も才能いをどかりける故也りやうのためーいまれなる事おればそのうちあるたぐひ學びがさかるべー（同）八一雪山まある草を名づけて爲忍辱草といふ文有彼靈草の同名まゝ通ぬ尋瑞草といふ名もあればいりまもうちある名の類まいあらぎ（つれ〜）女ノ髮ノメテタカランノ段事まふれてうちあるさまもも人の心をまよいー（愚管抄）三貞信公の御事いいかまも〜たゞ内ある人まいおいせぎ將門のむほんの時禁中まゝ仁王會ありける事行ひ給ひけるに聲をかりまて行ひ給ひて身いい人まみえ給いさりけり隱形の法など成就ーさらん人いりくやと覺えける云々

うちあらたむ打改（源をゆき）八今やうとていい打あらたむることの

うちあゞ（榮さまく）六まづいをひの和歌ひとつをりうまつるべーと仰らるゝまま宵のままと打あゞ申されば云々君をーいのりおきつれをと申たり云々おそーおそーと仰らるればまざよふりくもおもゆるりかと申さればいをどう興ドをめさせたまひて云々補（宇治拾）なまとかく鬼どもがうちあゞたる拍子のよゞまきまえれば

うちあゞの丶しる（榮見えてぬ夢）廿九。道兼病ノ所御隨身所大舍人所ハ酒そのみ丸丶しりて打あゞの丶しる（日本紀）十、顯宗八五手掌摎亮拍上賜吾常世等釋云拍上賜者飲酒義也

うちあげあそふ（竹取）此そゞ三日うちあゞあそぶ（榮淺みとり）十四よろづのとのハらまゐりまゐでうちあゞあそび給ふ（同もとの雫）四十五三日のそゞめでたくうちあゞあそびて過ぬ（空穗藤原の君）廿三おぬゝ七夜とよのあかりしてうちあゞあそぶ

うちあひ（源藤のうちえ）十三ことうちあひめやすき御あそひとおそさる

うちさまし（榮）四廿八。道兼關白ニナル所内大臣どのにいよゝ打さまし丶さるやうゝてあさましう人わらはれなる御有さまをひと殿の内おもひおゞき

うちき　袿（源末つむ）廿五かしらつき髪のかゝりバしも云々うちぎのすそまたまりてひかれたるそゞ一尺ばかりもあまりさらんと見ゆ

○おほうちき（空穗祭の使）八女のよそひ一具おらはり襠そへておそうちきとかさね（源桐つぼ）廿八おとゞ御ろくのものうへの命婦とりて給ふ白きおほうちぎゝ御そひとくさり（同紅葉賀）十七あざれさるうちき姿（弄）大うちきをかりそきて直衣をき給ハぬ也（枕）四五后のおハしまさねバ裳もきぞうちきをかさまて（後）春上、元日ゝ二上詞

條の后の宮ゝてゐろき大うちぎをゝさまもりて（花鳥）袿ゝ大小あり小袿ハ女房おらでハきせぬ也

○御うちきのひと　御袿の人（源紅葉賀）廿二上の御ゝづりぐしゝさふらひけるをもてゝはれハ上ハ御うちきの人めして出させ給ひぬるほどゝ（細）シタ丶メトテ御髪ニ參ル人ハ上ニウチキヲキスルヲイフ也（花鳥）藏人私記第十三云御髻御鬢事侍臣之間撰堪事之人供無定例皆着當色袍謂之御袿染紫色絹也納藏人所○今按御もとゞり御びんゝ參る人ハ紫のきぬの直衣を着て祇候するを御うちきの人といふ也

補　うちき　打着（枕）七廿六はのまハおへされど色などよきうちきたる三四人

うちきらし（拾）春家持「打きらし雪ハふりつゝおかをがゝ我家の園ゝ鶯ぞなく（源みゆき）六「打きらし朝ぐもりせしみゆきにハさやかゝそらの光やハゝし（万）八十八

うちきらし雪ハふりつゝ補（万代）春上肥後「霞つゝ空打きらしこきたれて花のちるでとあゝゆきぞふる（同）同、人道攝政左大臣打きらしおは風寒し石上ふるの山べの春のあゝゆき（續古）春上、西園寺入道前太政大臣「うちきらしたまらぬ雪の花のえにうつりゝけりおゞ鶯の聲

うちぎゝ（枕）十二五小野殿の母上おそ云々まゝもとい打聞ゝなりぬるおめり（同）十七

うれしきもの丶條物のそりもしハ人といひかもしさる歌の聞えてそめられ打聞お

ごとゝめらるゝ云々うれし（源常夏）廿四もとゞゝをしみたるさまにうちぎしたるゝ
深きをぢおゞえぬゝどのうちぎゝまゝそかしかなりと
補 うちゆく（万）十七十九「馬なめていさうちゆかゝしぶたにのきよきいそまによする
かゝを見よ
うちめ（源わかな）下廿九あゝめおくうをくうちめなどえからで（同やとり木）九十三くゝ
れゝゐのうちめゝべてからぬよ
うちゝたりのもと打乱筥（源繪合）一うちゝざりの箱かうでの箱（花）うちゝたりの箱
の上よて髪をけづる時打みざし侍れゞ筥の名よゝづれ侍るべし（後深御記）打乱箱
其筥盛櫛三枚
うちゝたれ（源繪合）廿一打ゝざれて聞え給ひても
うちしき（源繪合）十六左ゝしさんの箱よをもうのはそくゝきものよゝ紫地のからの
にしきうちしきゝえびぞめのからよしきゝり（枕）六五除目の中の夜さし油をるよ灯
臺のうちしきを（空穂としかけ）下南のひさしにおましよをゝに打しきどもゝなゝあ
たらし
うちゝきる（源桐つは）五まうのゞり給ふよもあたりうちしきるをり〳〵ゝ（同夕
かは）四十ゝづこゝろなく御しのびありきのうちしきる（同わらし）十五打しきりてつか
ゝさん と
補 うちひ（山家）上「苗代の水を霞ゝたゝびきてうちひの上よかくるゝりはり
うぢびと氏人（拾）戀一、二條攝政「大原の神もしるらん我戀ゝけふ氏人のこゝろやらゝん
（堀次）顯仲「杉むらよしめ引かけてうぢ人のひかるゞかりよゝがく玉垣
うちひかせ（大和物）四何のうちひかせ給ふべきよもあらぎ物をこゝたまゝせんと
すれゝさゝき物なり
うちひそゝぬ（源帚木）十三心ゞそれゝばうちひそゝぬかし（同椎かもと）卅八打ひそゝ
つゝ心よわゞにゝく（同夕顔）三ゝづからひそゝ御覽ぜられ給ふ（同をとめ）四十四い
とこゝろ苦しうて宮も打ひそゝ給ひぬ（同さわらび）十二「さきよたつ涙の川よ身を
ゝゞゞ人におくれぬ命ゝらましと打ひそゝ聞ゆ
うちものかゝらひて（伊勢物）二段それゝかのまめをとこうちものかたらひて
うちそゝぐ（源竹川）卅二ゝとうゝ打過したる人のさきゞそるわざを
うちそて（源帚木）八直衣ばかりをしどれゝゝくきなし給ひてひもなどもうちそてゝ
（同夕かは）卅九うちそてゝまどゝし給ふゞいゝゝゞき

うちぎゝ（源桐つゝ）廿五 かく心ゐそくておいーまさんよりい内ぎゝせさせゝまひて（同同）卅 ゐのかゝる御聲をゝぐさめにて内ぎゝのゝいこのまーう覺え給ふ

うり 瓜（清慎公集）物いひーー人は瓜の「ありーをゆ身とてうりつるよりなれゞのちゆゝらぎとたのゝぬるかな 補（御湯殿のうへの日記）は天正三年六月廿九日のぶゝ本集郡 ゞよりみれゝまくはと申ゝ名所のうりとて二つーん上云々（小大君集）「山ーろのとゝはかよひて見てーがゝうりつくりれる人の垣ねを（同）「ととゝはにゆれゞゝりけりうりつくりそのことなきにさてりーゆ君（同）「うりつくるそのふもーらぎ人ーれぎゝおつる涙やそゞつゝるらん（御堂關白集）「山ーろのうちにーゝれい立いでゝ都うりとてまるらゝる也

うりつくり（催馬樂）山城のこまのわたりのうりつくりゝよやらいーゝゝやゝ瓜つくりうりつくりれうりつくりわれをゐーといふいかよせんゝよやらいーゝゝやゝさいーなやいかよせんいかよせんもれいゝよせん 補（御堂關白集）「君ゞ代とゝもひゝる〳〵うりつくりまづもつ秋いたちてまゐれり（兼盛集）云々いとそかーゞゝるこうりをつゝゝていたーさりーかゞ「山ーろのこまのわたりを見てーかゝうりつくりけん人のかきねを

補 うりまろび（輔親集）「ふくゐーのけふよりゝゆる身はーあれゞ瓜まろびーて悅ぞゝる

うる 賣（拾）二「おきゝのみたつの市といさわゞどもいさまゞ人をうるよーもゝー（古）雜下 家をうりてよめる（大和物）二監の命婦つゝゝまはありゝる家をうりて 補（散木）泉爲夏友「たつのいちうるまのーゝづゝゝゝくてけふいかひある心ちこそゝれ（宇治拾）一、十三 その金をこひてゝへゞゝからんをりゝうりてゝぎよと申ーゝゞ。ウハ金ヲ遣フコトヲウルトイヘリ

うるゝーー きく う（伊勢物）四十六段 昔男いとうるゝーき友ありけり片時さらぎあひ思ひけるを（空穗祭の使）四十一 民部丞藤原のもとれりあさやゝようるゝーきよそひーゝゝぐれたる（源帚木）廿三 うるゝーき御有さまのとけがさく（同同）誠ゝようるゝーき人の調度のかぎりとゝる（狹）一、上卅二 ゝいがーろゝる御うちとけ姿のうるゝーきよりも中々ゝくて（空穗樓の上）下、六十二 夕ぞえーていといゝぞく色うるゝーう花やゝきよゞよゝえ給ふを（同同）上、三 おとゝざよことの音をゝく引立る事ゝえせぬものゝ（空穗藤原君）三 のたゝまからみおもーまーゝゝとそれど御中うるゝーくきよらゝる事かぎりなー（同）卅七 よき人の娘給へゞえで大將殿の兵衛佐の君同つゝのさに物ー給ふを

うるハしくのたらひ聞えてあるを(空穂國ゆつり)上七御とし十七さいばりまて御くしいとうつくしくきよゆゆあり補(榮月の宴)八ノ宮ノ后ノ宮ヘマヘ井リタマヘル處ニいらせ給ふゆゆいとうつくしけれゆあうつくしやなどめできこゆるゆどにおとねまうるハしうるさせ給ひて(空穂國ゆつり)中五十九大將こはしよりやをらの御りてみをのむさまこもりてあおをもとめ給へどいとどくうるハしくつくりされゆひまもおし(源氏もきふ)七こ奉る人もおけれどきゆおとりよせ給ハきゆやうにうるハしくぞものし給ひねる(源寄生)四十八ひんゆしの臺どもおとものけてのちうるむしくあたらしくあらまゆしきをいよいよこゆ犯をへ(榮初花)御いろしろくうるはしうはゝづきなどをふきふくらめて(源わか紫)廿三ゆまかきたるものゝ姫君のやうまおをゆられてうちみドろぎ給ふあとものかたくうるハしうてものし給へゆ(枕)十八九ばかりの人の髪のいとうるハしくてたけをかりをそふさやかなるがいとうるハしき長き髪を引ゆひて(落くを)四うるハしうこそハせめてなくとも世まに大路にも立たまハド(狹)びんづらゆひていひしらぎをかしゆあるわらもものさうぞくうるハしくしたる(宇治拾)五八かおこよこ書てさべといひけれゆ僧やをきことゝいひてのきたりけりはドめつかたいうるハしく云々などかきたり(同)十五九うるはしく戰おどにるとき

のやうまもあらぎ(源玉葛)四十五末。末摘花古跡ナルヘ人ノサマ也うるハしくものし給人まてあるべき事ハさゆへ給ハぎ(宇治拾)十四とくさのかりぎぬまあを袴きさるゆいとうるはしくさやゝとおりて(同)十二十六ひの裝束うるハしくおたる人の(源手習)五十四げまぞかたちハいとうるハしくれうらまて(同をとめ)五十五らうわさどのそりもしをわたりてまゐるうるハしきけしきおれど(同藤之かき)十、云々たしらまる人のかたり申侍りしなりといとうるハしきさまにかさり申給へゆ(盛衰)十二。靜憲鳥羽殿ヘ參らんとする處に此法印ハうるハしき人濁れる世をも澄し事あやをるまゆきものおれゆ何らくるしからんとゆるされけり(枕)七六廿ほそやりなるわらもの云々かこハうるハしきゆ(源もきふ)四昔やうまてうるハしきを(同同)六まぎるゝ事おきうるハしき御をまひにて(同とつね)十九わさくしの後宴あるべしとの給ひて御ことゆものうるハしきふくろどもしてひめおかせさまへるこおを引出て(同わかな)上四十八御おつらひなどのことくしくよさけくうるもしきお(万)十五廿六「うるハしくおもひしゆ思ハゆしたひもまゆひつけもちてやまぎしぬをせ(同)十六「うるハしくとあがもふ妹を山川をなかまへなりてやをけくもおし(同)十五廿一「うるはしとあがもふ妹をおもひつゝもけをらもとおゆきあしのるらむ○はしきとのこもいへり(万)廿三廿「見わたせゆむうつを

のへのもおにをひてりてたてるハはーきたがつま○鈴屋翁云をべてうるハーといふ言ハ古書ゑてハ美麗の意ゑハあらぎ俗言に「きつとーてかたい」といふ意みだれぎ正ーき意ゑいへり又云源氏桐つぼ十七うるハーう云々こゝハ楊貴妃の唐めいたるよそをひハあまりきつとーてかたくてたをやのゑてあらざりけんといへる也

補 うるハーこ（万）十七、長歌 廿七 君ゲ心をうるハーこ此よすがらにいもねぎゑ（同）廿四 十六 「うるハーこあがもふきこハおでーこが花ゑおぞへて見れどあかぬかも（同）十二 卅四 「梓弓末ハーらねどうるハーみ君ゑたぐひて山道こえきぬ

うるハーもの（空穂 國ゆつり）上四 十六 宮あゑくや此うるハーものハ何ーゑくるぞと聞えさー給ひつ

補 うるをひ（輔親集）「うるをひゑぬるべき身とーゝりぬれば降夏のよの雨もうれしき（山家）「水ひたる池ゑうるをふーたゝりをいのちとたのむいろくづやされ

補 うるまのーま（狭）一、下 こいいらゑかとようるまのーまの人ともおをえ侍るかな（公任卿集）ーらきのうるまの島人きてこゝの人のいふ事も聞ーらぎときかせ給ひてかへりでと聞えさりゐる人に（千載）戀一 「おをつかおうるまの島の人なれやわがうらむるをぞらぎがをなる（壬二）下「よそゑきくうるまのーまのうるさくいひざゑとなて思ひたえおん

うるふ（蜻蛉日記）中、上 十二 ゑとーハさ月ふたつあれば おるべー「とーでとゑあまれば こふるきこがこめうるふ月をばおくゑやあるらん（六帖）一、うるふ 月貫之（家集）同（後）春 下 あまり（後） 「うるひさへ有てゆくべきとーだにもはるにかおらぎあふよーもゲおゆ 補（續千）釋教

源信 「一時ゑそゝぎー雨のうるひつゝ三草二木も枝さーてけり（壬二）中「霜こをる柴のさえだやうるふらん煙ぞーめる山のべのさと（月清）上「民もをな君に心をつくばやゑまーげきめぐこの雨うるふよゑ（小大君集）「つねよりもこひーくなりて神無月さえぎも袖のうるふおるかな（赤染集）「常おらばゐふいそがまーたおばこのあまれもでろもうるふべきかな（公任集）「ひとつ雨ゑうるふ草木ハことおれど終ゑハもとゑかへらざらめや（万代）春上 鳥羽院 「ふる雨のあまねくうるふ春なれば花さかぬ日ハあらぢとぞおもふ○（拾員）「これやそれあまねくうるふ春雨ゑおの〳〵まさる四方のみどりハ（月清）下「民のともゆ神のめぐこをうるふらー都の南宮居せーより（兼輔集）十月ふこつあるとーの云々歌 かこおづきふたつあるとーの云々（古）春上 いせ やよひゑうるふ月のありけるとーよこけるー「櫻花もるくもハれるとーざゑも人の心ゑあかれやハせぬ（穀梁傳）文公六年 云閏月者附月之餘日也○信友云モト閏

ノ字ウルフトヨムニヨレル詞ナレバウルヒト唱フベキ例ナリ古書ニうるふとカナニ書ルハ本ハ潤閏ナド書ルヲカナニ書ウツセルキ其言ツガヒヲ心エヌ人ノモノセルナルベシ（蜻蛉日記）ナルウルフ月ハウルヒ月ト云フウルヒヲ又轉シテウルフト体言ニ反シテイヘリモキユユ（風雅）釋教法性寺入道「法の雨いあまねくそゝぐものかれぞうるふくさ木いおのゞゝおゝ（新千）慶賀同「さかへとるけふゝもあめのふるおといよのうるふべきゝるゝなりけり（著聞）十四、廿四そこにものんどうるへたまへといへば（拾愚）上「きゝがよのあめのうるひいひろれどわれぞめぐをの身にあまりぬる

うるさがる（後）雜四つねよくとてうるさがりてのくれければ（源はたる）十五ああむつかゝ女こそものうるさがりせぞ人よあさむかれんとうまれたるものかれ（同すま）十二のきつゞけんもうるさゝ（同夕かほ）廿七たゝけばやま彦のこたふるいとうるさゝ（同わか紫）九尼君髪をかきおでつゝれづることをもうるさがり給へぞをのゝの御ぐゝや云々（同とし姫）十八山がつのおどろくもうるさゝとて

うるさき（源夕かほ）六例のうるさき御心といおもへと（同帚木）十七うたがひ侍りゝもうるさくて（大和物）一法師よりぬる人いかくうるさき事いふものかといひれば（源夕顔）廿四うるさきことのありさまよおんあるを

うるさゝ（江談抄）三昔菅家右府時平爲左府共人望也其後右府有事左府薨逝故時人稱有人望者号右流左死云々。これい俗説なるべし 補（伊勢物）「むさゝあふささはがよかけてたのむよいといぬもつらゝとふもうるさゝ

うるせく（ウルハシキナリ）（撰集抄）眞範僧正の段使を山に入て此おとかきくどきくいゝくきゝ聞ゆれど露返事もゝ給いぞ云々うるせき人よこそ侍らめ（枕）十一十はる風い空よいとをこのゝうもいふ哉とそんせさせ給ふ后宮の詞たゞことよいうるさく誤せくの思ひよりて侍りつかゝ云々（源帚木）廿一立田姫といもんよもつきなからぞ棚機の手よもおとらぞそのかさもぐゝてうるせくおん侍りゝとていと哀とおもひ出たり。今本にうるさくとあるい誤なり（宗穂初秋）上六仁壽殿いうるせき人よおそありけれむこゝより後の世までいいむゆる嵯峨の御時の女御ぞかゝとそれよおとよおとらぬ（十訓抄）二江冠者とてありれるを車の尻よのせて具せられさりけるをかれこそのくのでとくゝかるこというるせく覺えて候へとて召出てとれれば（古事談）一春宮ニ被奉問ナルヲウルセク問ヒ給タリトテ（著聞）九一頼義を身をいおたてもたりけるゞきもめてうるせくおぞゆるかり 補（撰集抄）うるせさおさけのいろようつりて（同）後世のこのて

そいとおみさまふうるせき心をへおるべし（源わかな）下四十四 宮の御ことのねいいと
うるせくなりまはりか（伊勢物語古意）賀茂翁云いまへうれもしうれたきおぞい
有てうるさきてふ語いとえぞ物がたり文まうるせく侍るおど云い今うれしきと云
まと同じくて別也○廣足云此説誤おる事証文をとておるべし

うるせ（きさかり）（空穗 後のけ）上十七 日本へ歸りきさり云々御門いとうるせかりし者
のかへりまうで來れるおとゝ悦び給ひて（枕）十九 作り花をべてもなの句ひおど咲
たるまおとらぞいかまうるさ（せの誤 かりか）けん雨ふちばしをなんかしとるぞ口
をしき（撰集抄）八 年頃もうるせかりし物といおもひ侍りしかどもりくてあるべし
といおもいざりき（同）四 世のまどらひのうるせかりければ（宇治拾）十七 十かしこく
心をへもうるせのりれば（同）十四十六 白川院の御時北おもてのさうどまうるせき女
ありけり名をば六とぞいひける（同）二 此童も心えてけりうるせきやつぞかし（同）
童おれどもかしおくうるせきものいかゝる事をぞしける（源すゝむ）十 故權大納言
なまのをりくまもなきまつけて云々いふのひある方のいとどうるせかりしもの
と（同 初書）十九 もてしづめをくよかなるういべをかりいうるせかめり。今の本うるさかめりを
あるい誤なり

うかべ（宇治拾）十七二 我智惠い小箱の内の水のごとしおかるまは海万里をしのぎて來
る智惠をうかべよとて水をあたへつるおり（源あかし）五 ふかき御うつくしみおぞ
やしままあまねくしづめるとものがらをおそおぞく浮べ給ひしり（同まき柱）廿三 みお
かのしづを給ひし世のむくいいうらべしづめいとかしおくこそいおもひわたい給
ふめれ（枕）八一 扨古今の歌二十卷をミおうかべさせ給いんを御學問まいいせさせ給へ

うらぐふ（神代紀）上廿一 敢窺（ウカヾフ）竊此處乎（同）下 竊往覘之（ウカヾヒ玉フ）（源花のえん）四 ふぢつぼわさ
りそさりなうしのびてうかゞひありけど（同紅葉賀）六 れいのひまもやとうかゞひ
ありき給ふを事まて（同夢のうき橋）五 のゞのり心え給ひてうかゞひさづね給いん
まらくれあるべきことまもあらぞ（崇神紀）六 於朋者妬庸利干介伽卑氏（オホキトヨリウカヒテ）（源夕顔）十六
御使まに人をそへて曉の道をうかゞいせ御ありのみせんとたづぬれどそこはかとな
くまぞいしつゝ云々（宇治拾）十二十九 虎いまづ人をくもんとていい猫の鼠をうらぐふや
うにひれふして云々 補（好忠集）「やぶげくれきゞにのありかうかゞふとあやなく
冬の野まやさいれん

うかゞひ（源わかな）下五十九 小侍從さるべきをりうかゞひつけてせうそこしおこせた
り（同夕きり）三 よろづまうかゞひと給へどえみつけ給いぞ 補（宇治拾）二十九 此うた

んとをるをのおとゐうかゞひまゐりければ（同）二廿もーやきゝつくるとうかゞひけるをゐ（同）廿二さるべき所々うかゞひありきをるゐ（空穂としかけ）四十九ものゝふのねーづまるをうかゞひて（著聞）十六廿伊成まゝ父のねーきをうゐゞひてをゝまぬをうかれ（源あふひ）十八ひとふーゐようーとおゐーうゐれゐーまゝろーづまりゞたうおゐさるゝにゐや（狹）四十六下あさまーくおゐーうれゐさりー御けーきゐをこーおゐりかく有がたき御位ゐも定りたまへるゐ補（寛平后宮歌合）「恨つゝとゞむる人のおけれをや山ほとゝぎにうられでゝおく（万）十一「をみの江のつゐりあひきのうねのをのうかれかゆかむおひつゝあらをゝ（玉葉）雜五雅平女「世のうさゐおゐひ入べき山のむををゝうられてや月ゐいゞらん（万代）季宗「跡たえてをゝうかれにーつの國のいくたよりなき身をいかゐせん（山家）上「さらぬだにうかれて物ゐおゐふ身の心をさそふ秋のよの月

○うかれん（千載）戀五隆房「こひーおゞうられん玉よーゞーざゐ我おゐふ人のつまゐとゞまれ補（新古）戀四行遍「おでりをゞ庭のあさぢゐとゞめおきて誰ゆゑ君がをみうかれけん

○補うかるゝ（玉葉）秋下定家「をみゐびて月にうかるゝ道のべのかきねの竹をもらふ

秋風

○うかれて（宇治拾）七二京よりうかれて人ゐをかされて來りにる女房のありけるをいとをかーがりて養おきてゐのぬゐせなどつかひけれゞ

補うかれどり（万代）戀三入道前攝政左大臣「なそゐかく人のこゝろのうかれ鳥別れゐよそに聲をさつらん

うかれづま（續千）雜下齊時「一夜あふゆきゝの人のうかれづまいくたびのむるちぎりかるらん

うゐのれまどふ（狹）四中廿四君の御心のうかれまどひて露をかり心とゞめたまふ人ゐかくて

うかれめ（空穂藤原君）五十三君さちの御前ゐうかれめ廿人ゐりことひきうたうたひて御ぞさまもれり（六百番歌合）寄遊女戀九番季經卿「うかれめのうかれてありくたびまくらをそつきがたきこひゐするかな

うかれびと　浪人（三代實錄）十三廿八貞觀三年冬十月淡路國浪人物部冬男補（天智紀）浮浪（天武紀）浮浪人（桓武紀）浪人（續紀）天平勝寶七年五月丁直大隅國菱苅村浪浮云々（同）天平寶字二年十月甲子云々陸奥國浮浪人造桃生城（三代實錄）元慶三年二月

十五日庚子紀伊國浪人當麻眞人岑吉佐渡國浪人高階眞人利風

うがつ（夫）九 爲家「紅のたつ花ぞめをそつるかな水そうがてり水のむちすゝ 補（枕）五、あドろをさへつきうがちつゝこゝまたゝ〳〵とさゝあつむなり 廿

補 うがねらふ（万）八、四十二 此をこのゝそゝかふみおゝゝうがねらひ云々（同）十うがねらふとゝ山雪のいちゝろく云々

うがのゝさま（神代紀）六 倉稻魂此云宇个能美拖磨

うのぶ（古）雜上、よみ八しらす「わさつゝのおきつゝあひにうのぶあゝのきえぬものからよるかさもなゝ

うがひ（水鏡）上 允恭 水をとりて御うがひを奉りたまひゝついでゝ云々御うがひも氷りてもち給へる手もひえ通りて

うがび（源ゝをつくし）六 とりのへゝ花やぎ給へバ御子どもなどゝつむやうゝ物ゝ給へるをゝおうかび給ふ（同 帚木）卅七 女のゝくせいうかびたるおんあれゝ侍るおと聞えさゝ（同 夕がほ）卅七 うかびさる心のゝさびゝ人をいたづらゝなゝてんらでとおひ給べきがいとかゝゝきおり（同 東や）七 さらゝうかびさる罪侍るまドき事おり

○うかバぎ（源ゝし姫）廿九 われいうのバぎ

○おまうのび（源 帚木）十三 おまうのびゝていかへりてあゝき道ゝもさゞよひぬべくぞ覺ゆる

うかびたること（源 東や）六 ようもあないせでうらびたるおとをつたへゝるとの給ふゝ

補 うかを（狹）二、上 おりものゝ御さゝぬきの枝ざゝ花のゝをひたゞをりて見るやうにおりうかされさるめもかゞやくたこのり見ゆるゝ

うたへ 訴（續古事談）二 大神宮の訴へにおとゝで歸り給ゝせ給ひにけん（宇治拾）六、六十 それゝわれをゝてゝゝをまぬ事ゝされゝらもうたへ申候ゝん帝王これをゝとわり給へ（和名）刑部省 宇多倍多々須都加佐

うさりた。シハシ計ノ意ニモ危キヿニモイヘリ クヾ泡ヲサシテモイヘリ 必由詩得（方丈記）ながれゝうかぶうたかさのゝつきえかつむをびてひさゝくとどまるおとおゝ（師氏集）「庭のおもゝうきてたゞよふうたかたのまた消ぬまにのゝるよの中（六帖）六、下（万）十五 もかれそゝたてるむろの木うたかたの久敷時を過ゝけらゝも（六帖）三 にはたづみ「ゝはたづゝ木のゝた隱れ流れぎゝうた方花を有とゝまゝゝや（同）「うきおとゝ世ゝふるものをたきつせゝまさにうさかたたえんものとい

（同）「うたかさのむまやゝ人のおもひつゝ匂ひいろあくそめてしものを。契沖云不合題

（同）「うさかさもおもへばあかしよのあかそたれうきものとしらせそめけん（同）

（後）戀五よみ人しらす「ふりやめば跡さはさえぬうたのたのきえてもかあきよをたのむか

か（同）伊勢（後）戀一「おもひ川絶ぬ流るゝ水の沫のうたかた人はあとも消めや（赤

染集）「雨ふれば水はうかべるうたかたの久しからぬわが身なりけり（万）十二「う

さかさもいひつゝもあるかわれしあらばつちはおちずそらはなまし（源まき

柱）卅五「かゞめする軒の雫にそでぬれてうたかた人をしのばざらめや（續古）哀傷崇德院

「かきくらし雨ふる川のうたかさはうたてほどなき世とおもらそや（續後拾）哀傷大納言

師氏「水の面にうたてさゞよふうさかたのまた消ぬまはかもる世れ中（万）十七、廿五「鶯

のきなく山吹うたかさも君が手ふれぬ花ちらめやも。ハカナキ心ニテコヽ、ハシバシノ心ニトル（万）十七、才誤

八「大ふねのうへにしをれば天雲のさどきもしらぬうたかさわがせ○今本歌乞

チウタカフト訓ルハヨシナシウタカタニテ不定ノ意ナリ（万）十七、十八「あまざかるひ

なはあるわれそうたかさもひもときさけておもほそらめやシハシト イフ心也○賀茂翁說ニ

ウタカタハ潦上ノ上ニ浮泡ノヿニテ空像（ウツカタ）トイフコトナルヲハカナクアヤフク定ノ

ガタキヿニタトフ巻五巻十一ニモ既ニ出タリ補（拾玉）五「うぢ川の石まをわたて

うたかさのまひめぐるらんかゞそこひしき（山家）下「河のせはよはは消ぬべきうた

かたの命をおぞや君がたのむる（續後拾）雜中慶融「おもひ川たえぬながれの末とだは

しらるゝそのうたかたもがな（小大君集）「瀧の水木のもとちかくながれぬいう

たかた花をありと見ましや（源まき柱）「ながめをる云々（玉小櫛）云うたかさの事

拾遺にくもしたしらにゝ心得ゞさき詞也あ不よく考ふべし（拾愚）中「いづミ川か

ゝあをきよくさをさそのうたかさ夏をおのれけちつゝ（同）下「きえぬべしみれば

あみざの瀧つ瀨はうたかさ人の跡をこひつゝ（同）「今ゝたゞわゞ身ひとつのおも

ひ川うたかさきえて瀧つしらなゝ（新千）戀三親行「おもひ川うたかさあみのきえかへ

りむをぶ契りハ行へだになし（万代）戀四馬内侍「我戀はくらべてしがあ雨ふれば庭の

うたかさ數をかぞへて（新續古）雜下慈鎮「山川のあがれは契るうさかたゝいく世をふ

とも何かしづまん

うさがさり（源さかき）卅五をきゝしき歌がさりあとものうさゝは聞えのゝさせ給ふ

ついでは（同とこ夏）廿四をゝしらぬ歌がさりをそるもこゝづかひつきくくて

（同やとり木）六十九はかあくてよゝ給ひれるうたがたりなどをつきあからぎうちわ

なゝきたれどかたるもこめかしうことぎくあゝる物ゝら

うたがまーく（枕）五、十露とりわきさる方もおくてさをがまー歌がまーく我いとおもへるさまーさいそまよみ出侍らんおきー人のためいとやーく侍るおど（元輔ヲサス）

うさがふ（源桐つぼ）四坊まもようせぎい此君のる給ふべきおりと一のみこの女御いおやーうさがへり（同帚木）四もてもなれたることをも思ひよせてうたがふもそかーとおやせど（同）十四さーあたりてをかーとも哀とも心まいらん人のさのもーげおきうさがひあらんこそ（同末つむ）十一をきーーき方まうさがひよせ給ふまこそあらめ（同桐つぼ）廿三ことおり給ひなば世の疑ひおひ給ひぬべくものーまたへば

補（兼輔集）「色もかもことにまほへる梅花ちるうたがひのあるや何おる（源わかあ）上、廿八おほーひてのちのよの御うたがひのこるべくい（同）同冊いかにおもひうさがひ給いんおど（万）十二、廿「大海の底をふかめてむそひてー妹がこゝろいうさがひもおー

○補 うたがいれ（月詣）十宗隆「梢にも庭わもみえぬもえちをいーものーさこそうさがいれけれ

○うさがいし（源桐つぼ）廿七いとかうきびもおるやどいあやおとりやとうさがもーきくおやされつるを（同あけまき）五おやーおきつる方の事おるまやとうさがもーき事さへそひておん（枠）戀五、よみ人しらす「うらみぬもうたがもーとぞおもほゆるさのむ心のなきよとおもへば（伊勢物）九十段限りなくうれーく又うさがもーかりければ（同）四十二段ものうさがはーさによめるなりけり補（源わかな）上、廿九つかうまつりさにことや侍らんとうたがいーきかたのさおんこゝろくるーく侍るべき

○うたがひよ（後）戀四大江千里まかりかよひける女を思ひられがさにおりて遠き所にまかりわさるといもせて久ーうまからぎなりまけり此女思ひこひてねたる夜の夢まうで來さりとさえけれい疑ひまつかはーけるまみ人しらす「もるかおる夢のおるーまもかられてうつゝまくる身とやおりおん

うたがひおー（蜻蛉日記）二扨ひるい日ひとひ例の行ひをーよるいあるドの佛ぞねんドさてまつるめぐりい山おれいひるも人やさんの疑ひおーをだれまきあやておどあるま

うたがき 歌垣（續紀）十一、十九天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品以上有風流者皆交雜（古事記）下卌二立干歌垣（武烈紀）一二歌場此云字多我妓

うさよさ（源玉かつら）四十六古代の歌よさい（元眞集）十春筑紫まて歌よみあまたーてよむま（大和物）一「數ならぬ身まれくよひのーら玉い光りさえさす物にぞあり

けるとよゝて奉りければ見たまひてあな面〳〵のたまのうたよみやとおんの給ひける

うゝよゝをげまゝく（枕）七三。行成詞 女少〳〵我ゝと思ひさるゝ歌よみがまゝくぞあるさらぬこそかたらひよけれ

うたゝ（源手習）三十 うゝゝあるまで世をうらみ侍めれば（後拾）秋上 「おもふことあれば

れぬれぬ我袖ゝうたゝあるのべの萩の露かな 補（万代）雑二 俊惠 「うゝとてもいらぐ

此世をいとふべきうたゝあるよの月のゝかなかな

うたゝね（古）戀二 小町 「うたゝねゝ戀〳〵き人をゝてゝより夢てふものゝゝさのみそめて

き（兼澄集）「うゝゝねのひるねの夢ゝあやめぐさむをぶとゝつるうつゝあらおん

（拾）戀四 「たらちねの親のいさめ〳〵うたゝねゝ物おもふ時のわさまぞ有れる（源ら

き舟）十六 おさゝ〳〵る物どもとりぐゝて几丁ゝ打かれおどゝてうゝゝねのさまゝより

ふゝぬ

うたかげめ（夫）十三 信實 「月のよの聲もやそめまゝどあれてゝゝろをやれる歌かげめ

かな

うゝのほうゝ（源藤のうらは）廿六 御前ゝゝな御琴どもまゐれりうたの法師のゝいら

ぬ聲も朱雀院ゝいとめづらゝくあたれゝまきゝゝめを

うたまくら（源玉かつら）四十七 万のさうゝ歌枕よくあなひおりみつくゝてその内の

おとゝをとり出るに（古事談）二 一條院御時實方與行成於殿上口論之間實方取行成

冠投弃小庭退散云々 實方ヲ歌枕見テマヰレトテ被任陸奥守 補（松の落葉）云ふる歌

ゝよめる天のゝさの名どころを世の人歌まくらといふゝ歌よみのまくらでとゝに

るゝゝろゝやあらん源氏物語桐つゝの巻ゝやまとことのたをもゝろゝゝの歌をも

たゞそのそぢをぞまくらでとゝせさせさまふとゝえてまくらでとゝゝつねのこと

ぐさをいふよゝにおもゝるれゝおり又おもふゝ〳〵かゝゝあらでまくら詞のさぐひ

ゝてよむかたのゝさをけゝ名どころをそるゝゝろゝやあらんいひむでめゝるゝゝろ

ゝさだりにゝりえげたけれど名どころを歌まくらといふことゝゝものにも見えつ大

鏡五の巻に六十よゝくのうたまくらゝ名あがりたるとゝろ〳〵おどをかきつゝま

ゝらをるゝとありかくあれゝふるくもいひつるおとゝおん

うゝまひ（履中紀）十二 樂人を訓せり（神武紀）上一十 歌舞而祭矣

うたふ（源わか紫）四十 聲ある人〳〵てうゝさもせさまふ云々ふゝかへりうゝひゝるゝり

（同末つむ）卅二 うたひをさびて出給ひぬるを（同すゑ）卅四 舟どものうたひのゝ〳〵りて

こぎゆくかぢも聞ゆ（伊勢物）六十五段 笛をいとおもしろくふきて聲いとかしうてぞあれまうたひける云々人の國まありきてかくうまふ歌云々 補（夫）鶯、清輔 「天の戸をおし明がたにうたふなりあや鶯の朝くらの聲（同）喜多院入道二品のみこ 「鶯の聲まに光りやそひぬらん月まうまひて谷をいづなり

うたぶくろ 歌袋（夫）五 篤題 「いたづらに鳴や蛙のうまぶくろおろかなるまも思ひいれをや

うたて（古事記）猶其惡事不止而轉（同）安康ノ條 侍其大長谷王之御所人等白宇多豆物云王子（ノタマフミ）○常ニウタテシキト云意也葵卷ウタテ所セウモアル哉イカニオヒヤラントスラン、又、人ノ心コソウタテアル物ハアレ云々コレラモイヨ〳〵進ミテ甚シクナル意也以上古事記傳八十ニノ（源 末つむ）廿四 そううたていざとき心ちをるよのさまかり（同）廿五 さきの方少〳〵さりて色づきたる事あとの外にうたてあり（同）廿六 まろげかくかたもまかりかん時いいかからんとの給へばうたてこそあらめとて（同みをつくし）廿八 宮の中のきさも同ドほどまおもそれバうまてひゝな遊びの心ちをべきを 補（大和物）後人のものいひあどもうたてあり（万）十二 「をかづきのさやまもえを雲かくりをまくぞをゝき宇多手（ウタテ）このごろ（職人尽歌合）まひちうけさいまざあきな賣の詞に

ひなきうまてさよとある此うまていうき事まいへり此おろいおくあやまりつかへるまや松の落葉四の卷まも此詞の意をいへり（大和物）「からくゝておもひわずるまひゝさをうたておきつるうぐひすの聲（空穗 藤原の君）十 うたてあるふみをみせ給ひけるかか（同）うまておもをる君かかとて（同さかの院）十七 うたてきゝろふ人がちかりけるを

うたて（菅万）うたて匂ひの袖まとまれるといふ歌のウタテヲ別樣トカ、セ玉ヘリ（春記）二 瀧口定清去夜不得盜人太以別樣也トアリ此別樣モウタテシトヨムベキ也（源 わふひ）四十七 人の心こそうたてある物いあれ今い一夜もへさてん事のわりなかかるべき事と覺さる（同 帚木）廿五 情かくうまてある事をかんさる便りありてかをめいもせたりける（同夕かほ）十六 昔ありけん物の變化めきてうたて思ひなげかるれど人の御けもひもた手さぐりまもゝるきわざなりけれバ（同かしい木）十二 いとうたてもゝゝき御事ありかとでかさまでいおぞけ（同東や）七 此人つゐさうありうまてある人のこゝろにて（同）八 いざや初よりをかいひよれる事をおきて又いもんこそうたてあれ（落くぼ）一十六 うたて心なゝとをえられたるやうまこそ人まゝられぬ人い無心なるこそよけれ（空穗 國もつり）下九 兵衛の君云々とて引とゞむれバあかまづ

らいーやむらさるの心ちこそそれ兵詞大將の御とねりどもぞかー大將うさてある隨身よこそいとの給ふ程に（同藏ひらき）上、一。人ノ屍ヲイフ さぞ其人々れめぐりまうたてあるもの野へもとびもてさせさふらへとて（同あて宮）五。アテ宮參リ 物のむドめまいとうさてと思へど對面せんと物ーつれいおぞの給ふ（同初秋）上、十七 御いらへあおうさてさる心やい見えーこと人をこそ物せらるめりーり（同國ゆつり）下、十五 いざやうたて聞ゆるよなれば人もやうさていひおさんとてぞや（拾）夏、よみ人しらす「うさて人思むん物をほとゝぎすによるーもおぞり我宿よなく（後）戀四、よみ人しらす「まどろまぬものからうたてーかすがよ現にもあらぬ心ちのみをる（古）十九「花と見てをらんとすれば女郎花うたてあるさまの名よこそ有れれ（伊勢集）廿一、詞 秋の頃うたて人の物いひれるよ（新古）戀四 朱雀院「玉ゆあの道い遥よあらねどもうたて雲井よまどふ頃哉（家持集）廿二「おぞうたて吹あき風ぞ藤ばかまぬぎてらをべきいもーまさぬに（古）春上 素性「ちるとゝてあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にとまれる（菅万）（古）戀五、よみ人しらす「心おそうさてよくれそめさらばうつろふことをもーからまーや（竹取）十七 むやかの御使よ對面ー給へといへばかくや姫よき形よもあらぎいかでら見ゆべきといへばうたてもの給ふかな御門の御使をばいかでかおろかにせんといへば（枕）九、十

六 舞い、太平樂いさまあーけれどいとをらーー太刀おどうさてくあれどいと面白ーもろおーにかたきよ具ーてあそびれんおどきくよ（源わか紫）初 ーゝこらかーつる時いうたて侍るを補（源わか紫）十七 ゆよわらやかおる人こそらたてもあらめ（後拾）釋歌 增基「おちつもる庭をぞにとてこるものそうたてあらーのもきよむくかお（土佐日記）此あるドの又あるドのよきを見るようたておもゆいろ〳〵にかへりでとれ（万代）雜六 和泉式部「常よりもうたて物こそかおーけれ我身のたてよ成やーぬらん（續古）哀傷 崇德院「かきくらー雨ふる川のうたかたのうさてゆどおき世といーらぎや（新後）秋下 公顯「とゞまらぬ秋こそあらめうたてなどもをぢをさへよさそふあらーぞ（新續古）春上、山階入道前左大臣「なぐむればこぬ人またる春のよれ月こそうさて空ざのめおれ（雅亮裝束抄）うさてきことおり云々（源東や）五十七 人のものいひいとうたてあるものおれば

うたてぞ（枕）一、五 花もちりたるのちいうたてぞ見ゆる

うたゐ 歌畫（後）離別 ちちのくよまかりける人よ扇てうドて歌畫よかゝせもべりれる（源梅かえ）十四 あーて歌畫を思ひ〳〵よかれとの給へば補（大かゝえ）うたゐどもからせ給ひーゝきーがたを云々○俊賴集ふいと多ー歌を書べき料の畫讃をもべきた

めの書也といへり

うさびと　歌人（拾）雑秋三條太政大臣家まて歌人めし集めてあまたの題よませ侍りけるゑ云々

うれ（土佐日記）九日、云々「見ゑさせゞ松のうれでとゑもむ鶴いちよのとちとぞ思ふべらかる（万）二廿「後ゑんと君ゞむもべるいもーろのおもつゞうれを又ゑねんかも（同）十五柳のうれゑ鶯なきつ（古）雑上よみ人しらす「さゝのもゑふりつむ雪のうれをおもゑもとくざちゆくわらさのりいも（後）冬よみ人しらす「松の葉にかゝれる雪のうれをおそ冬の花といいふべのりれれ補（万）十四、十九云々かきつやぎうれつゑからー（散木）「これきゝむこせのさやまの杉のうれゑ雨もゑのゝみゝゑよくきらなくかり（風雅）雑中爲基「曉やまざふゝゝらー松のうれゑわかるとものきゑねのーらくも（万代）春上仲正「ゑさの山ふもとめぐりのよこがはゑるーの杉のうれかゝのくーそ（山家）下「山ざとの人もこゞゑの松がうれゑあもれゑきゑるゞとゝぎにかゝ（拾愚）下「うら風の吹上の松のうれこえてあまぎる雪を浪かとぞゑる（万代）雑三三條入道左大臣「かゑいゞたあーのうれゑにーは風を身ゑさむーとやたづのゝくらん（續古）雑中、中務卿親王「見わゑせゞーゞ風あらーびめゞまや小松がうれゑかゝゝるーらかゑ（風雅）秋上重資「影よわき柳ゞうれのゆふつく日さびーくうつる秋のいろゝか（玉葉）雑二院御製「ひゞきくる松のうれより吹おちて草に聲やむ山の下風（拾員）「桐のもうれふく風の夕まぐれそゞや身ゑーむ秋い來ゑけり（風雅）五定家「うちーめり薄のうれいおもりつゝゑー吹風ゑなびくむら雨

うれもー（源わかゑ）下、四十三大將の君ゑい宮の御方より盃さーー出て宮の御そうぞく一くだりかづけ奉り給ふをおとゞあやーや物の師をこそまづい物めゝー給ためうれもーきこととなりとの給ふに（全穂嵯峨院）廿一よろづのうれもーからん事をも誰ゑかい聞えんとてこそ云々（伊勢）四十一（後）戀三「いとはるゝ身をうれもーをいつーかと飛鳥川をぞ頼むべらなる（古）雑上詠人しらす「足引の山田のそほつおのれさへ我をほーといふうれもーきゑと（榮ゆふして）廿一鶯のうらわかき初聲もうれたーれれゞきくをいとふなぞありれんもまことおりれりと（源末つむ）十一もとのことを思ひもおちさらんけーきこそうれもーかるべけれ

うれもーく　き（源わか紫）十一なゑがー此寺ゑこもり侍るといゑろーめーかから忍びさせ給へるをうれもーく思ひ給へてゑん（同わかし）十三こゝらかゑーきさまゞーのうれゝーきこととのをおそかるゑ（万代）雑一資實「秋の田のほのかにたゑもーらせぞや

さてるそのつのうれいーきあと補（玉葉）冬俊成「うい千どりなれもや物いうれいーきたべそのもりを行かへりなく（源とゝとめ）五十二宮人をも御よういおくうれもーきことのそおかるゝ

うれへ（宇治拾）七二此事を爲家聞て前よよびて問はれば我うれへありゝかりと悅てこと〳〵くのびあげりていひれがよく聞て後（源藤末葉）九とのゐ所讓り給ひてんやと中將ゝうれへ給ふ（枕）十二三ゝらいめを見さふらひつる誰ゝうれへ申さふらいんとてなんとなきぬばこのりのねーきゝていふ（竹取）五かのうれへせーさくそらそばゝくや姫よびそゑてうれーき人どもありといひてろくいとおそくとらせ給ふ（中務集）卅五「戀ーくいあらぬまでゝもうれへつゝ人ゝいふべきことあらぬかな（仲正集）廿九法師の閨ゝ男ありとて法師のうれへ申さんといふを聞て（六帖）四「かゝ戀いくるーき物とそでもりの神ゝうれへてーらせてーげな（同）同「そでもりの神ゝうれへんかくそかり戀ーき人をそゝと思へば（源橋ひめ）ぬれ〳〵參りていたづらゝへらんうれへと姫君の御方ゝきこえて哀とのゝさまもせば（神代紀）下廿六何故患於此處乎（源さわらひ）十二思ひはることどもうれへかけ聞めるもりゝさくなーなれど（同さかき）五十四のくと宮ゝもうれへ聞え給ふ（空穗祭の使）四十一魂ゝおきてい身のうれへある時おそやはわたくーゝうれへをおーゝき人もーづまらぞ事このおふ時ゝいふあくのものもをさきりぬ（同あてみや）廿二まつりでとかーとき世ゝうれへ奉らんとてうれへ文そつくりて（續古事談）たかき机の上ゝうれへ文のもてといふ物をおかれたりければ（太政官式）十二徒引旬月致令愁訴（宇治拾）三十三さけのさいふといふものひたちよりのぞりてうれへそるところ（同）八十九其事のうれへ出きてさゝのあらんぞるにこそあめれ云々そのあた報せんとうれへ申せば補（拾愚）上「よもをがらつきゝうれへてねをぞおくいのちにむかふ物おもふとて（玉葉）雜一忠兼「花の春いあざーー色ともうれへゝき月見る秋ぞ物おもひもおき（同）雜五宣子「くらーかねおぐきおもひの春の日ゝうれへとものふ鶯の聲（風雅）秋中章義門院「わきておぞよるーもまさるうれへゝてあくるそきいゝむーのおくらん（同）雜上治部卿經方「身のうれへおぐさむかとて見る月や秋をこのさねて老とおるらん（同）同俊惠「あがむれば身のうきことのおぞゆるそうれへがそにや月も見るらん（玉葉）雜一永福門院「物でとゝうれへにもるゝ色もなーすべてうき世そあきのゆふぐれ（同）同具顯「秋ゝそふうれへもりおーいつまでと思ふわが身のゆふぐれの空（同）同、今出河院近衛「時わかぞうきゝようれへいそふ物を秋の心とそれりさだめー

○うれふ（源末つむ）廿三 いとゞうれふかりつる雪かきたれいとゞうふりなり（同桐つぼ）廿一 そなたはてをれいみたれうれふることやあらん（同うつせみ）十 なをえさふまゞくなんとうれふ 補（万代）雜一知家 「おもふこと空にあふぎてうれふれば鳴ても鴈の涙をふらん（隆信集）「たれはかゝ身より外はいうれふべきうきをあとわる人ーかければ（拾愚）下 「行かりのさが秋のせとうれふらんなをもふせゞぬいそのとまやは（玉葉）雜五家親 「をづまさるもや瀬のふねもわゞでとやのゆりもやらぬ世をうれふらん

○うれひ（源あふひ）十六 あやを給ふ人の御ありさまもうれへきこえ給ふ 補（万）九廿三 あゞきけふおもひつゝこゝーうれひやをぬ

うれたく（古事記）上十 三にもつとりかけいなく宇禮多久母那久那留登理加（源うつせみ）二 小君はいとつらうもうれさくも覺ゆるにおひて思ひかへせど心はーもーたがいをくるーきをさりぬべきをりをみて云々（同わかな）下二 ことわりとゝ思へをもうれたくもいへるかな

うれさき（神樂）蕤きりゞゝをのねたさうれさき（万）八十 三 宇禮多岐也をこほとゝぎを聽のうらかなーきはおへとゝ○契云日本紀慨哉此云于黎多棄伽夜李善秋興賦注云慨許既反說文云大息也字林云慨壯士不得心也

うれたー（源竹川）十一 侍從の君カチルまめ人ナリ 玉カツラ先ニサイヒシ也 うれたーと思ひければ（源藤のうらと）八 「紫はかでとゝかねん藤の花まつよりすぎてうれたれとも（空穗たゝこそ）十四 帶ノコチ御門詞 うれさき人かな我いひーはゝ子出來なばとらせんといひーをさはこそありなれ（伊勢物）五十八段 「むぐらおひてあれたる宿のうれさきいかりはも鬼のすだくなりけり（源わかな）上 けふの子の日こそ猶うれたれれ（同あつまや）卅一 いとうれさきやうなる

補 うれむぞ（万）三 「わさつをの沖にもちゆきてもなつとをうれむぞこれかはよをかへりなむ（同）十一 「あら山のこまつかうれのうれむをいわゞおもふ妹はあもぜやをなむ

うれー（万）五十八 「我せこと二人をませばいくをくゞ此ふるゆきのうれーゞらまし（狹）二十四 槇の戸の思ひかねぞやをりーもよべいうれーゞりーはゝ（續紀）卅五 十 伊豫國與利 白祥鹿平 獻奉天 在禮方 有禮志與呂許保志止奈毛 見流（源玉鬘）廿六 たゞ是ををぐれさりとゝ聞めべきなりゞーと打ゑをてを奉ればおい人もうれーと思ふ（源帚木）卅四 その人ちゞゝらんなんうれーのるべき

補 うれしがる（風雅）春下西行「まそゞおふるあら田に水をまかをれいうれしがるよも
おくかさづかな

補 うれしがる（枕）七廿一 さらばいかまめでたからんなど申にうれしがりて宮の御
まへまも

うれしう（源わか紫）廿五 心ざしの程を御覽じあらばいかにうれしう

うれしく（源東や）十三 媒ノ心いとうをしくおりて（同玉鬘）廿八 いであてきいかでかくお
ひ出給ひけんとおとゞをうれしく思ふ（土佐日記）下四 廿ぬさまい御心のいとねゞ御
舟ものかぬかりおほうれしと思ひたぶべき物たいまつりたべといふ（大和物）二院
の御せうそこのいとうれしく侍りてうく色ゆるされ侍る事など聞え給ふ

補 うれしさ（續千）雜中慈鎮「うれしさをつゝそならひし袖はまさその身はあまるはふ
とこそしれ（同）同西園寺入道前太政大臣「袖はなをふさゝびつゝむうれしさもわが身ひとつ
とおもふものかハ

補 うれしひ（万）十九十一 おもひのべ宇禮之備なのら

補 うそ 篇（山家）下「もゝそのゝもなにまがへるてりうそのむれさちをりい散こゝ
ちする

うそぶき 〈（源まほろし）八 歌云々 うそぶきありきさまふ（神代紀）下廿六 居濱而嘯之（ウソブキヰテ）
（源竹川）十一 紅梅の木の元は梅枝をうそぶきて立よるけしひの（續古事談）此日文範
民部卿いさせるめしなきあまるりて座よさふらひて舞のほどにうそふきけきゞ主
上より初めてこる人おとがひをとかぎといふ事なし走くるひとおんいひあへりけ
る（源あけまき）六十 時よつけさる題出してうそぶきもしあへり（同東や）四十七 宮もあ
ひてもあいぬやうかるこゝろをへはこそうちうそぶきくちすさび給ひしり（同藤
のうらい）三 花いとおちりとゞれ霞たどゝしきにおとゞ昔おぼし出ておまめかし
ううそぶきながめ給ふ（平家物）廿八 月まうそぶいておいしける所へ（更科日記）廿五 舟
の梶とりたる男ども云々 袖をのゝまくりてうそまあてゝさそまおしのゝりてとゝ
まは舟もよせぎうそぶいて見廻しいといみゞうをみたるさま也 補（字鏡）嘯 宇曾牟久（万）
九廿二 木根取嘯鳴登（ソフキノトリ）（蜻蛉日記）又の日もまたしきまきのふいうそぶこのせさまふこと
しゞろめりしろい（空穗 初秋）八十九 このそさるをつゝみかがらうそぶく時は云々 此
そたるそさしよせてつゝみながらうそぶき給へば

うそをふく（弁内侍日記）下 弁い行幸のとしまうそをふくやくをつとめたべりし 補
（著聞）廿三 十左右ともにうそをふく。鳥ナリ（コレハ）

うつ 衣ニ（源のわき）十八 今やう色のまゝくうちたるあゞひきちらし給へり

うつ 碁ニ（源うつせみ）三 西の御方のわゝらせ給て碁うたせ給ふといふ

うつ 打（源まき柱）十六 うちまゐりさゝぐ云々夜一ようゝれひかをおきまゝひあかし給ひて○（河社）ニアリ（高光）五 詞云々橘のありたる枝おゝをとりうてゝそをまゝいをてたてまたゝをとて（順集）冊判一の詞歌 わぎもこゞ女郎花てふあゝら名を玉の疵にやゝむすびうつべき（神代紀）棄ウツテ 参考スベシ

補 うづ（山家）下「おほちゆくかこゝのとゝろ心せよまたうづもやきせとわたる也

○うづまく（堀次）落花顯仲「谷川ゝ流れて花のうづまくゝ岩根ゞたきの波かとゞ見る此川とかも（万）

（拾）雜上（万）九（六帖）三「川のせのうづまくゝれば玉もかる散ゝゞれゝる川の船かつね（六）

も 補（兼輔集）「君こふと聞こそわたれ山川にうづまく水のゝゝかいあらねゝ（齋宮女御集）「かゞ見えぬなみゝの淵い衣手ゝうづまくあゝのきえゝぞ」ぬべき（頼基集）

「もゝぢゝのかゞれうづまく淵をあゝくれ行秋のゝゝりとい見れ

うつ 機數又額ニイフ（宇治拾）十二 一條富小路ゝゝゝきうつて聖寶がわたらんゝんとて十一 川邊イ

（空穗 藤原君）四十九 賀茂川の邊にゝゝきうちて男君達おゝ」ゝゝゝ（同 吹上）冊七 おゝ

前ゝゝゝいゆひあゞゝりうつたり（平家物）一 東大寺の額をうつ云々興福寺のゞく

をうつ（著聞）七九 御經藏といふ額を一枚ゝきておき給ひければ只今うつべき經藏も

なゝれば云々ゝの師かきおゝる額ありとてとりめされたりければうたれゝるゝゝ

神慮ゝ叶ひて有けるこゝやんでとなく覺ゆれ○つれ〳〵草ゝゝきうつといふ事

をゝのらゝゝかきけるいなゝ〳〵ゝわろ〳〵

うつ（空穗くら開）上二五 十九 ゝケノ詞 又おゝゝゝの君のおゝろ〳〵おい〳〵ゝゝゝ宮の

御ゝへゝおいゝれば宮のけおゝらせ給ふこゝ藤つゞのかたゝ〳〵も殿下文丸云天下ノのお

とゞゝえ打奉らせ給ゝゞおゝとゞかゝゞれなくいいかでゝうたれ給いん（同 國ゆつり）

下九 南の方ゝ宮ゝたがいふやう大將殿こゝこのてらゝきぬゝゝ〳〵侍ゝの御物みゝと

るゝとの〳〵れば大將ぬすみゝるおゝやゝいようゝうつゝやゝいらへ給へば○文丸按ウ

ツハ犯ス心ニテオサヘ蔑如スル心カ又按ルニ是ハタヲウツコカ

補 うつ（鐘に）いふ（新葉）春下、冷泉入道前右大臣「もつせ山入相のゝねもうちゝびぬありでくれぬる

花のなゝりゝ（万）四「ゝゝゝ人ゝねよゝとのかねいうつゝれど君をゝ〳〵おゝへばいねが

てぬゝのも

補 うつ（田に）いふ（素性集）三月ゝ田うつを

うつろふ 變ヘ也（万）六、四 十一「世のなゝのゝゝ常ゝきものゝと今ゝ〳〵るゝゝらの都の移徙ウツロフ それば

（拾遺）秋人丸（人丸集）（万）十「天の川あぞのわたりのうつろへばあさせふむ間は夜ぞふけまさける（源帚木）十三又おのめはうつろふ方あらん人をうらみて云々心いろふ方あり（同）六時世うつろひておやえおとろへぬれば（源榊）卅四げあいをーき枝ともあれば御日とまるは例のいさゝのある物ありけり人々見奉るに御顔のいろもうつろひて

うつろふ移也（源桐つぼ）廿五おやーまぎるゝとゐれどおのづから御心うつろひてあよおくおやーおぐさむやうなるもあれなるわざありけり（同紅葉賀）十六そろーうもかたゞけおくもうれーくも哀はもかた〳〵うつろふ心ちーて涙おちぬべー

うつろふ散也（万）十七、廿三「春花のうつろふまでにあひをねば月日よをつゝ妹まつらんぞ（伊勢物）十八段菊の花うつろへるををりて（万）七、卅三「月草は衣色ぞりをらめどもうつろふ色といふがくるーさ補（古）春下「春風ゐ花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん（後）春下貫之「風をぞはまちてぞ花のちりなまー心づからはうつろふがうさ○をべて後世はゐ只色のゐゐるをのを移ろふといふと心得れどもさはあらぬ古へいちるをもいへる證歌古今後撰などは多〻顯昭の注はも其さゝあり然

るを定家卿ゐちるをばうつろふといいもぬよーー密勘はものたまひ又ちるをうつろふとよめる歌を僻案抄はもうつろふとゐ花も何も色のおとろへ方にかゐりゆくをいふとあれどもたーかは散事をいへる歌ともあれば疑ひあーー云々近き歌はも新古今に後鳥羽院御製「けふだにも庭を盛とうつる花消ぎゐありとも雪かとも見よおれ散をよませ給へり云々

うつろふ移也（源あけまき）さるべき所はうつろゐーー奉らんなど（同ましし姫）九うつろひをゝ給ふべき所のよろーーきもあかりければ（同まつ風）初東の院作りたてゝ花ちる里と聞えーうつろゐーー給ふ（同ゆふひ）卅一野の宮の御うつろひの程はもの（源帚木）四十八わた殿は中將といひーーげつぼねーーさるかくれにうつろひぬ（同蓬生）四いとかう物おそろーーのらぬ御ををひはおやーうつろむなん（同夕かを）四十四山里にうつろひなんとおやーーさりーーを

うつろふ影ノ移也（夫）五大輔「かへる鴈みたらー川はうつろひて水のーらべのことぢかりけり（後）春下よみ人しらす「花ざのりまたもをぎぬは吉野川ゆゆはうつろふきーの山吹（新古）冬是則「影さへは今ゐと菊のうつろふゐ波の底はも霜やおくらん（金葉）春長實「鏡山うつろふ花を見てーよりおもかげはのみさゝぬ日ぞなき（夫）十八兼盛「をかり

する野中のしづかげをしてとりかふ鷹のかれぞうつろふ

うつろひ（伊勢物）八十一段神無月つゐもり方菊の花うつろひさかりなるよ（源やとり木）四お前の菊うつろひもてゝさかりなるゐろ

うつろひ（とりのへもや）一八うつろひたるふるまひ（古）春下、よみ人しらす「春霞さをびく山のさくらゐなうつろもんとや色かわりぬく補（万）六、四、長歌十三春花乃遷日易（ウツロヒカハリ）

うつろひまさる（狭）三、上十二御顔の色うつろひまさらせ給ひて（同）三、中二十さわやかよ物もえ給いせねバ只御顔の色いとゞしゆまして云々いとゞ御顔の色うつろひまさりて云々

○あゝろうつろふ（拾）春元輔「物もいもでおがめてぞふる山吹の花に心ぞうつろひぬらん

うつもの（源帚木）九もこのゞゝき世のりためとゐるべきゐとものうつもものとゐるべきをとり出さんよいかさかるべゝかゝ（同わかる）下、五十四おきてひろきうつわ物よいさいもひもそれよゝたがひせべきゐゝろ有人いさるべきよてたりき身となりてもゆさかよゆるべるりたいおくれ（伊勢物）廿三段いひりひとりてけゐのうつわものよもりけるをして

うつを空（狭）下、五十七鳥のこゑも聞えぬ木のうつをゐどよて苔の筵をしき松のもをた

べて虎狼といふものを友とをゐらひて

うつは衣（源玉葛）四十五やま吹のうちきの袖いとゞすゝけたるをうつをよてうちこの給へり○（花鳥）よかさねのきぬもゐれそうつをといへり

うつをばゝら（平家物）一、殿上ヤミ打の段うつをは柱より内鈴の綱の邊よ○雨だりをうくるとひなりといへり（夫）十四。うつはもしらと隠し題周防内侍「よもそぐら衣うつをバゝら波のさつのとよそよきゝあかをかゐコレハホナシテヨメリ（同）卅三信實「しのぶわれてうつをばゝらにかくるひハもるてふ水のくちやゐからん

うづち卯槌（江次第）二、三絲所進卯槌云々結付畫御張懸角柱副立細木爲柱槌末出五尺許可用桃木又四方可削近代九也失歟（枕）四ノ廿六五寸斗ゐる卯槌ふたつをうづゐのさまよかゝらつゝみゐどゝて山橘日蔭山をゆなどうつくしげよゐのざりて（源うき舟）七うづちをゝうつれ〳〵ゐりれる人のしわざとみえたりわがきみのおまへよとてうづちまゐらせとまふ○（細流）卯杖同事ゐり年中ノ惡鬼を追ふゐり補（枕）七、廿六もゝの木わかだちて云々うづちの木のよからんきりておろせこゝよめにぞゐどいひて

うつりか（源夕かは）六もてゐらしさるうつり香いとしをふかうなつかしうて（同わ

けさき)五十二あさけのそゞたをそおくりて名でりとまれる御うつり香おとも(同わかむらさき)四十一かの御うつり香のいみゞうえんまゝかへりたまへれば(同こうばい)十四うつり香ハゞまこそこゝろあとあきまゞらひゝたまたんをんなおゞいさいえゝめぬかな(古)雑上友則「せゝの羽の夜のころもいうそけきどうつり香あくもにそひぬるゝあ

うつりゝもる(源すゝ虫)九世の中さまゞまつけてはかあくうつりゝもるありさまもおゞゝつゞはられて

うつりやそき(とりゝへもや)四、廿九いのつきくさのうつりやそきい

うつる(源あふひ)十五物のはいきそさまあゞいふものゝ云々人にさらまうつらぎたゞそづからの御身まつとそひたるさままて(同わかな)下、十二右大將の君大納言にあり給ひて左まうつり給ひぬ補(躬恒集)「あたらゝくわきのそやそん菊の花うつらぬさきまあん人もかあ(新古)戀四太上天皇「袖の露もあらぬ色まぞきえかへるうつきばかいるなゞきせゝまに

うつる(源もみち賀)廿三。扇所の赤き紙のうつるばゝり色ふかきに(同末つむ)三十五わが御ゝのゞの鏡臺まうつきるがいときよらあるをそ給ひて(金葉)戀上題季「我戀ゝ鳥羽

まかくあとのもものうつらぬそどいゝる人もあゝ(更科日記)一九月三日このゞでゝて いまさちといふとあろまうつる(貫之)十八(玉葉)賀「こゝろありて植たるやどの花 あきゞ千年うつらぬ色まさりゝる(同)(拾)雑下「春秋まおもひみゞれてわきかねつ 時まつけつゝうつる心ゝ(源あおいせ)七 されに御心うつりてわさらせ給へる(同 ととめ)六時うつるべき人まうちおくれて世おとろふる末に(狭)三、上卅四をゝゝの御まそひや猶とまりて枕にもうつりまたり

うつたへ(忠見集)「春雨ゝふりそめゝかどうつたへまやまをみどりまあさんとやそゝ(蜻蛉日記)一導師のもとめまも願文詞うつたへまに秋の山邊をたづね給ふにゝあらざりけるまあおとゞ給ひゝ所まて經のあゝろとかせ給もんとまこそありけれとゞりいふをきくまO(河)二ウチツケノコゝロモ同シコトナリ(とりゝへもや)卅六。大將ノ心内侍ヲそゝみたそへりゝ御かそにおゞえたるかあとふとおもひ出れどうつたへまその御ありさまのもりぬらんとおもひよらぞ(土佐日記)下うつたへまわそれなんとまハあらで戀ゝきこゝちゝやそめて又もあふる力あせんとあるべゝ(源ふぢもかま)六ときにもゆるさでもさまへればうつさへにおもひもよらでとり給ふ(細)二ヒタスラナド云コゝロナリ一向ニノコゝロナリ(土佐日記)下廿此詞のう

さのやうなるゝ梶とりのおのづからのことゞ也梶とりゝうつさへまわきうさのやうなるまといふとまもあらぎきく人のあやゝく歌めきてもいひつる哉とてゝき出せきゞけにもみそもゞあまりなりれり○契云ウツタヘトハヒトヘニといふあゝろなり(万)四八十「榊まも手ゝふるとふをうつたへまも人妻といへゞふれぬ物ゝも(同)十六長歌ありぎぬのさからのあらがうつさへゝへて織布日ざらゝの(同)四十七五「うつさへにまがきのもゞさみまくゝりめかんといへや君をまもあそ(同)九十「うつさへまとりいむまねとゝめむへてをらまくほゝき梅の花かも○(暑解)打ゝ詞さへゝ堪の意ニテヒタスラニといふこゝろなり(八雲)うちたへてなりひとへまといふこゝろなりまたうちつけといふこゝろも同ゞ補(新勅)戀一定家「松がねそ磯邊の波のうつたへまは顯れぬべき袖の上かな(新拾)戀五定家「おのれのみあまのさかてをうつたへまふりゝく木葉あとさまもなゝ(李花集)「きそぢ川うつたへ瀬々の波あらゞ行めぐりても立かへらまゝ(新後撰)秋下太上天皇「此でろゝ麻のさでろもうつさへまは月まそさねぬ秋の里人(壬二)下「ゝゝりれる身をうつさへまは空蟬のおもふものからさのみつるかな(拾員)上「軒の雨のむなゝきむしをうつさへまねられぬ秋のよもぞつきなき(蜻蛉日記)上五「うつさへまは秋の山べをたづね給ふまゝあらざりれる(濵松)一上

うつたへまかうておもひらんとおもひよらんやゝ

うづたかゝ(宇治拾)三一「うづたかくふたおれもれぬきぬかとものおとのやりまは有

補うつそみ(万)二九卅「宇都曾臣等おもひゝ時に

うつゝ現(古)戀三「かきくらそ心のやそにまどひまき夢現とゝ世人さためよ(同)物名「ぬぢ玉の夢まかゝかぐさまんうつゝにたまも逢ぬおゝろそ(後)戀二延喜御製「うつゝまもとあべかりける草まのみまどひゝ程やそるれかりけん(源夕顔)四十三はゞめよりあやゝうおやえぬさまかりゝ御おとかれゞうつゝともおやえもかんあるとの給ひて(万)五十「現まゝあふよゝもなゝぬぢ玉の夜の夢まをつぎてこえおそ(源ゑふひ)八十「うつゝの我身かが(同わか紫)十七いとわりなくてみたてまつるさへ現といおやえぬぞわびゝきや(枕)九二。宮ノ御アリカマノヲチ畫まかきたるをこそかゝるおとゝこるまうつゝまいまだゝらぬを夢の心ちぞそる(伊勢物)九段「するがなるうつの山邊の現まも夢まも人まあむぬ成けり(源手習)六十八中〳〵ほかまゝ聞ゆることもあらんかゝうつゝのひと〳〵の中まは忍ぶることたにゝくれある世中ゝかぞ思いりて

うつゝからむ(枕)十二、宮の御前のみぐるゝと御覽せんゝ更まわびゝきこと限りな

ー身より汗のあゆれハ云々いとどうむづのーゆにきよげなる御さまどもして打ゑ
ゝてゝ給ふもうつゝならぬ（源夕かほ）四十三もゝめよりあやーうおぼえぬさまなり
ー御おとなれハ現ともおぼえぬかんあるとの給ひて

補 うつゝのゆめ（拾玉）二「あられふるーづがかやゝの板びさーうつゝの夢を殘さ
まーなば

うつゝのひと（枕）五廿雨ふりぬべーといへばいそぎて車よのるゝ云々まづ此車のさ
まをいとゝく笑ひ給ふ侍從詞うつゝ人の乘たるとおん更ゝとえぬ猶おりてみよ
など笑ひ給へば

補 うつかふ（詔詞解）六四相宇豆奈比（中臣壽詞）相嘗仁（アヒニ）相宇豆乃比（ツナヒ）奉利（ツリ）○神のめで給
ひて受納ー給ふ意あり

うつかく 決

補 うづらのとこ（新千）秋上恒明親王「風むらふうづらの床ハ夜寒ゝて月影さびー深くさ
のさと

うつらゝ（万）廿四十六「なでしこが花とり持てうつらゝとまくのやーき君ゝも有
かも（土佐日記）めもうつらゝ（メノマヘニコダアキラウ）鏡ゝ神のとゝろをとそいとつれ。つらゝに（袖中
おなし

抄）ウハヤスメ詞ニテソフル也云々コト心モナク物ナミルヲバツラゝトミルト
云ナリ 補 鈴屋翁云うつらゝ也万葉卷一つらゝゝ見つゝおもふか又
つらゝゝゝ見れどもあかぬといへるゝおなじ

うづむ 埋（源東屋）五ろくをとらそることうづむ計ゝてもてさとぐ（拾）別讀人「ち
るもかゝ道みえぬまでうづまかんわかるゝ人も立やとまると（源梅かえ）六西のわ
たどのゝたたよりいづるみぎゝ近ううづませ給へるを云々（同まぼろし）四うづみ
さる火おゝー出て

うづの御てぐら（祝詞）珍ノ字のとゝろ貴びでとゝいへり

補 うづく（著聞）十二廿木幡ゝて四月の比ぬを人をとらへてとひいまーめて置たり
なるゝそのぬを人のゝめる「もさまれて足いうづきの時鳥をきいをれどもとふ人
もかー（發心集）うづきひゞらき身もほとゝりて

うつくし（空穗 藏ひらき）上八十一をとこたちいとうつくしーげゝ形よく人ゝをゝめ
らきつゝあまたもたり（竹取）三寸ばかりなる人いとうつくしーうて居たり（源桐つ
ぼ）六いとゝをゝひやうゝうつくしーげなるひとの（同）廿五いとわかうつくしーげゝて
（同）廿六名だかうおもをる宮の御かたちゝも猶ゝをゝはしーきいさとへんかゝおくうつ

くしげなるを（同夕かゞ）四十八 みたきかき給へるいとうつくしげなり 補（榮月の宴）

うちふるまひいらせ給ふほどいとうつくしゝをゝあなうつくしやなどめできこゆ

るほどゝ（万）十四廿九「さちをかのこもものむかりがおもふかむまゝろうつくしいであ

きいかな（同）廿九冊「おやきそのゝことかしこみうつくしけまこがてもなきしま

づたひゆく（隆信集）梅の花云々うつくしくさきたる枝どもをりて

うつくし（土佐日記）歌云々となんよめりかくいいふものゝカハノうつくしけきば我コノカハユシコヽロ

ゝやあらんいとおもしぎおり（源末摘）廿二かのむらさきのゆかりたづねとり給ひて

いそのうつくしゝをこゝろいり給ひて六條わたりゝざゝかきまさりたまふめきば

（万）五七めこ見きばめぐしうつくし 補（源わかな）上七十六めづらかゝうつくしとおもひ

聞え給へり見ナナリ

うつくしがり（枕）六七松君のニオバカリ也をかしう物の給ふを誰もゝうつくしがり聞え

給ふ

うつくしよし（夫）九俊頼「をゝなへしなまめき立る姿をやうつくしよしと蟬のなく

らん

うつくしむ（枕）八二うつくしき物、そかしげなる兒のあからさまいざきてうつく

しむをゝにかいつきて寐入たるもうたし

うつくしう（大和物）五昔大納言の娘いとうつくしうてもち給ひけるを（空穗 瀛開）

中十一大將てゝよいうつくしうし給ふやいざしらぎおと宮をこそよるひるいだき給

へ（枕）四十一。雪山のところ物のふたゝ小山うつくしう作りて白き紙に歌いみどうかきて

參らせんとせしあとなど啓もきば

うつくしき 愛ナリ（齊明紀）四十干都倶之枳あげわかき子をおきてうめかん（空穗 瀛開）

上五十六中納言い内ゝもをさ〳〵まゐり給いぎありきもし給いぎ宮と大宮とをいざき

うつくしゝをてる給へば（同）中廿六宮の兒をせよ〳〵との給ひしば云々うつくし

をていざきもちておもせし（源さかき）四十九八つ九つばかりにて云々さうの笛吹な

どをるをうつくしゝもてあそび給ふ（同とつね）十九。源ノタキリノ上ナノ玉フ所猶しゝまいはの

をきゝる筋のこゝろをこそとゞむべかめきもてしづめをぞよろかるうゐべをかり

いうるさかめりおどいとうつくしとおぼしゝり

うつくしきもの（枕）八二うつくしき物云々

うつくしみ（源をとめ）卅二さゞ此姫君をぞ云々御かたもらさけぎうつくしき物ゝお

ぼしゝりつるを（同東や）廿二わか君いだきてうつくしゝおもを（榮若枝）十八いざきう

つくしまゝせ給ふ（崇神紀）三神恩（カンウツクシミ）（神功紀）貴國鴻恩（ミクニツクシミ）（崇神紀）十汝等二子慈愛共齊（カツクシヒニヒトシ）。カハユシト（古）序あまねきおゐんうつくしゝの波やしまの外まで流れ云々（源イフ心ナリ）かしい木）十かぢりゐゝしき迄まおいしまをとうつくしゝを聞ゆれば（枕）五七のたむらいたきもの、よくげなる兒をおのれがこゝちよかあしとおもふまゝようつくしをあそばし是が聲のまねよていひけることをおぢたりたる（源わかし）五ふかき御うつくしゝをおゐやしまよあまねく（同わかあ）上七十五うつくしゝを聞え給ふいことをりありや（同同）七八十兒うつくしゝを給ふ御こゝろよて

うつぶし（源玉かつら）十四いとたのあき心ちしてうつぶし給へり（同わか紫）十ふしめになりてうつぶしたるよこゐれかゝりたる髪のつやゝとめでさうそゆ（同夕かほ）廿八右近ゐかさたちにうつぶしふしたり（狹）三下四十七うつぶしよふしたり（源槇柱）廿一まさ逢もぬやうもおそあれとおゐにようつぶしてえわさるまゐとおもゐしさるを（同やとり木）廿八をとしおきあがりてれもするに云々おそし打守り聞え給ふをもづかしくおゐしてうちうつぶし給へる髪のかゝりかんさしおどおゐいとありげさげなり（宇治拾）五四十こまぬきてうつぶしたるやうよて云々（同）三廿一船よのりたる者舟をたよるてうつぶして海をみれば（同）七十長谷にまるりて御前ようつぶし伏て申けるやう（狹）四中十六御ゐゐいそどう赤くなしていとゞうつぶし給へるゐ世よしらぎうつくしげなるを（源あけまき）六十八いゐかるるよかと覺すよ云々お前よさし入給へるをうつぶして御覽ぎるよ云々（狹）四中八ひきとゞめ聞え給ふをゞおもひもよらぎ打そかへり給へるに星のひかり古本星月夜よ烏帽子のふとそえさるよあころまどひし給ひてやがてうつぶし給ひて音もしさまもぬを○宣長カ説ニ全剝（ウツハキ）トアル全（ウツ）ト同シクテ其儘ニテ伏スナウツブシト云丸寐ト云ニ同ジウツムキニ臥ニハアラズ誹諧歌ウツブシ染ノ所ニ言ルハ違ヘリ補（宇治拾）六十九うつぶしよふしぬ

（同）三立もしりゐるものいうつぶしよさふれよけり（著聞）十二十八さちあがる目のあひを射てうつぶしよいふせて

うつぶし　腰ノ（空穗　櫻の上）上五十二七十二よおもしませといと清らにわかくたゞ今ぞ五十計とそえ給へる御ぐし白からぎ御腰をこしうつぶし給へり

○補　うつふく（宇治拾）十一十四うつふきて見るよ弓のかげい見えぎ（著聞）十七十うつふきてよに心よゆよをゞ〳〵と皆のそてけり

うつぶしぞめ（大和物）六「霜雪のふるやの中よひとりねのうつぶし染のあさのけさおり（古）ない「世をいとひおのもとでとよ立よりてうつぶし染の麻のきぬおり

うつぶしめ（續世繼）八十三 おゝい殿いふとおゝろえていろもりてうつぶしめ給へる云々

補 うつぎかきね（寶治百首）後成「夏くれば衣ゲへて山賤ゲうつぎ垣根もしらかさねせり（枕）廿一 うつぎ垣根といふ物のいとあらくゝしうおどろかしげにさし出さる枝かどもおほかるは花いまゞよくもひらねむてをつゞをゞちは見ゆるををらせて云々

補 うづさのいと（新勅）戀一 後成「御しめ引卯月のいとをさを日より心はかゝるあふひ草かな（拾玉）四「年をへて卯月のいとをさしてこそねふはあふひを契おきねれ

補 うつぎさね（賴政集）「神まつる比はしかれいうつぎさを小屋の袖ゲき花咲はけり○信友云灌佛ノ日ノサマ也年行秘抄灌佛ノ下毎至四月八日買花供養幷浴佛ナホ此説ミエタリ時花ノユエウノハナヲ供養スルサマ也

うつし（古事記）下廿九 我大神有宇都志意美者顯大身

うつし 体ノ語（源句宮）十一 ことゝくよりもいどましくおやしてそれいはざとよろづのをぐれたるうつしをしめ給ひ（細流）薫物ナリ荷葉梅花ナドイフガ如シ

うつし 語ル。口上ヲ口ウツシ取次ナリ（源夢の浮橋）廿小君ノ詞 さゞ一ことをの給いせよかしあどいへば尼君はゝなどいひてのくあんとうつしかされども物もの給いねば

うつし 顯（神代紀）四十二 此云于都斯

補 うづしを（万）十五、十五「あれやまの名におふるとのうづしをまたまもかるてふあまをとめども

うつしとり（源紅葉賀）十七。冷泉院ノ ヲ さるゝいとあさましうめづらかなる迄うつしとり給へるさまたがふべくもあらぬ（狹）三、中卅七 打わらひ物などの給へるもあさましきまでうつしとり給へるゝ（空穗初秋）下 此をさるをつゝをながらうをふく時はうへいとく御覽ドつゝてあをしの袖にうつしとりてつゝみらくしてもて參り給ひて

うつしうま（和名抄）十五、一 鞍和名久良 俗有唐鞍移鞍結鞍等名（源東や）四十三 うつし馬ども引出して殿ゐはさふらふ人十余人計して參り給ふ○ウツシハ唐鞍ヲウツシ作シ鞍置シヲ其マヽ移馬トイフベシ然ルニ空穗物語の中まて案をれば引替ノ馬ヲ移シ馬トイヘル所アリ平家物語ニモ其意ナルトコロアリ事長ケレバ略之別ニ考アリ明阿說

補（空穗藤原の君）こうまやよりうつしうまども引たり。廣足前ニ考一冊アリ

うつしうゑ（古）秋下貫之 人の家なりける菊のもとをうつし植さりけるをよめる 補（新拾）秋下行濟「うつしうゑば千世までよはへ菊の花君ゲ老せぬ秋を重ねて

補 うつーれめやも（万）十五、卅四「もるの日のうらゝかーきまおくれゐて君まおふるまうつーけめやも（同）十二、十二、四君まおくれてうつーけめやも

うつーこゝろ（万）七、卅三。一云 眼「こちたくゝともかもせんを紅のうつーでゝろや妹にあゝざらん（人丸）十（風）戀五（六帖）（万）十一「まそらをのうつーでゝろもわれゝかいで（古）ーー夜晝わのぎ戀ーわされば（猿丸）（古）四戀「みかん人ゝことのみぞよき月草のうつーこゝろあひもおもたぎ（万）十二、百「うち日さを宮まゝあれど月草のうつー心ゝ我おもゝなくま（同）同 同「もゝまちま人ゝいふともゝ月草のうつー心ゝわれもまめやも（源葵）十八 身をそてゝやいまれんとうつー心おらぎ（万）十二、十三「うつせみのうつー心もわれゝかーー妹をあひ見ぎて年のへぬれば（源紅葉賀）廿八 まことまゝうつー心かとよ（狭）二、下廿九 帝后まに限りあらん御前のゐぞもも引とゞめられさせ給ひぬべうおゐーめされば きるてうつーでゝろの通ぞせ給もん日迄ゝ片ときも立のき聞えさせ給ひぬべくもあらねど（同）二、下十二 四ものおもふまたまーひもあくがるゝときゝ誠まおそ今ゝうつーでゝろもあき心ちーて（蜻蛉日記）四きけばれいの所まーぢくかんときくうつりまけりとおもふからうつーでゝろもあくてれみをるま 云々（六帖）六、下（人丸）「さくら花木つたひ散ぞ鶯のうつーこゝろも我思ゝなくま（顯季集）「駒まおくうつー心もなきことに戀わたるとゝ人ーるらめや（四條大納言集）「朝夕まに常ならぬ世をかげくまうつー心もなくかりまれり○空ュ、ロ二ッアリ 契說アリ 補（源ま きはしち）十五 うつーでゝろまてかくー給ふぞと思むゞ

補 うつーきる（源ゑし姫）卅二 ーろきあやの御ぞのかよ〳〵といひーらぎまゐへるをうつーきて身をもさえかへぬものかれば

うつーひと（源手習）四十八 うつー人にてゝ世まおゝせんもうさてこそあらめ（同夕きり）六十七 あまの衣またちやかへぞー猶うつー人にてゝえぞぞまどかりれりとひとりでとまの給ふを○在俗ニテハノコ、ロナリ

うづゑ 卯杖（東宮式）八 凡正月上卯日早旦東宮參於內裏坊官率舍人四人舁御杖案隨之云々 大夫差進啓曰正月 能 上卯日 能 御杖供奉 氏進 長久 登 申給 登 申令曰置之（夫）一 輔親「君げため常磐の山の玉椿いもひてとれるれふの卯杖ぞ（同）盛永「万代にありきの山の白椿君げさかゆく卯杖にぞきる 補（散木集）七日卯杖まあたりさりける日常陸守常兼げもとよりわゝかまそへておくりれる歌「老らくのこーふさへなる身なれどもうづゑそつきてわゝかをぞつむかへし「もとのゐるつゑまをがりてつきければ そのーるーさへたのもーきゝかな（同）伊勢まに侍けるとーむつきの一日卯日まあさり

けれバそうちゝ卯杖などさてまつるを見てよめる「ゝふぞーるこえくる山のゝい
しさゝ年もう杖をつくゝや有らん(同)むつうの日よめる「あさまーやむつうの杖
のつくゝとおもへバ年のつもりぬるかな、おなじ心よそて人のゲりつかいーける
「とへがーなけふのうづゑゝをがられてよゝよろゞへる老のすゲさを(伊勢大輔
集)「あらさまのとーもわらかも摘人いうづゑつきてやのべにいづらん(後拾)春上 伊勢
大輔「うづゑつきつまゝゞーきいたまさのゝ君とふひのゝわゝなゝりけり
うづゑゞがひ(榮つぼみ花)十七うづゑゞゲひむどいふあゝちあそそれとてーのびや
らゝわらふを(夫)一卯日御かたゝゲへよりまだ曉ゲさゝらへらせたまふとて卯杖
ほがひをきあーめーて花山院御製「朝まざき祈る卯杖のーるーあらバ千とせの坂
もゆかざらめやゝ〇ゞがひゝほぎをのべていへるあとバゝてことゞぎかどの類か
るべー

うづもれぬか(和泉式部集)上内侍かくかりて次の年七月ゝ例やる文ゝ名ゝけらゝれ
さるを「もろともに苔の下にゝ朽ぞーてうづもれぬ名をゝるぞらなーき
うづもれふーて。衾ニマツハ(枕)三終レテナリ冬のいゝとゞう寒きゝおもふ人とうづもれふー
てきくに鏡のおとのたゞものゝそこあるやうゝ聞ゆるもをらー

うづもれて(源ゝをつくし)廿七さりとてらくうづもれてすぐさんそおもたんもかか
ならきーかたの年でろよりもこゝろづくーかり(同東ゃ)君ゝよりさる東の方のは
るらかる世界ゝうづもれて年經けれをゝゃ
うつせ(源かけろふ)三十いかかるさまゝていづれのそこのうつせゐまゞりけん(花)
(細)うつせ貝かるべー

補 うつせかひ(續千)戀五爲實「身をバさておもひぞそてーうつせがひむなーき戀の恨
せーまゝ(續拾)雜上藻壁門院但馬「數ならぬみくづゝまゞるうつせがひひろふゝつけて袖
ぞーをるゝ(續拾)雜上越前「捨やちぬ我身のうらのうつせ貝空ーき世とおもふもの
から(新後撰)戀二公雄「おもふ事ありその海のうつせゲひあもでやそぬる名をやのこ
さん(續後撰)雜中後頼「いゞざきのこぬみのもまのうつせがひもようづもれていくよ
へぬらん(同)雜下好忠「なゝのうつゝーまの浦のうつせがひむかーきからゝそれやな
りかん(兼輔集)「立よらむこのたもーられぞうつせがひむなーき床の波のさわぎゝ
(續後拾)戀一土御門院「いせゞまやみるめゝまゞるうつせゲひあもでーをるゝ袖ぞか
なーき(万代)戀五長方「誰をかいうらゝもをべきうつせがひ心くゞくも我からぞかー
(後拾)戀一國房「このら衣袖ーのうらのうつせ貝むかーき戀ゝとーのへぬらん(大和物)

「よゝおもへあまのひろてぬうつせゞひむかゝ名そゞさつべゝやきゝ

うつせゝ（古）春下よみ人しらす「うつせゝの世まも似たるゝ花櫻さくとゝゝまうつろひまけり（源ゐふひ）四十一御をつらひよりもゞめありゝまかいることもかれゞ空蟬のむかゝきこゝちぞゝ給ふ補（和泉式部續集）蟬のからゞ物の中にあるを見て「けふりゞん事ぞかなゝきうつ蟬のむかゝきからもあもれこそあれ（續後撰）戀四肥後「夏山の梢まとまるうつ蟬のわれゝら人いつらきかりけり（後成卿女集）「夏でろもうをくや人の成ぬらんうつ蟬の音まぬるゝ袖かな（万）十二、十三「うつせゝのつねのあとはとおもへどもつきてゝきゞゞ心いかくを（拾員）上「うつせゝの夕のこゑいそめかへつまだ青葉なる木々のゝたかけ（拾愚）中「かもり行袖の色こそ悲ゝれ音をなきもてよ秋のうつせゝ（玉葉）雜四兼輔「立よらんかゝもゝられゞうつせゝのむかゝき床の波のさゞぎに（續千）戀五興風「かきわびて身をうつせみと成ぬれゞうらむる聲も今いきまえと（同）同法皇御製「もりかゝとこひもうらゝもうつせゝのむかゝき世まいねのゝかられて

うつせみのよ（源夕かゞ）四十八「うつせゝの世いうき物とおりまゝをまた言の葉にゝゝる命よ（万）三、五十六「空蟬の世い常なゝとゝるものを秋風寒くゝぬびつるかも

うつゝ（古）春上よみ人しらす「梅ゞ香を袖にうつゝてとゝめてい春いゞぞとゞかたゝから

まゝ

うつゝ。摸スルコ（源こてふ）八わざとひらゞりかどもうつされゞ

うつゝ（源夕かほ）廿二ひんがゝ山の邊まうつゝ奉らん

うつゝ。顔ヲニッ（源みをつくし）四春宮の御元服のことあり十一にかり給へゞはどよりおゞきまおとかゝうきよらまて只源氏の大納言の御顔をふたつまうつゝたらんやうまは見え給ふ

增補雅言集覽卷之廿九終